

晩秋の旅

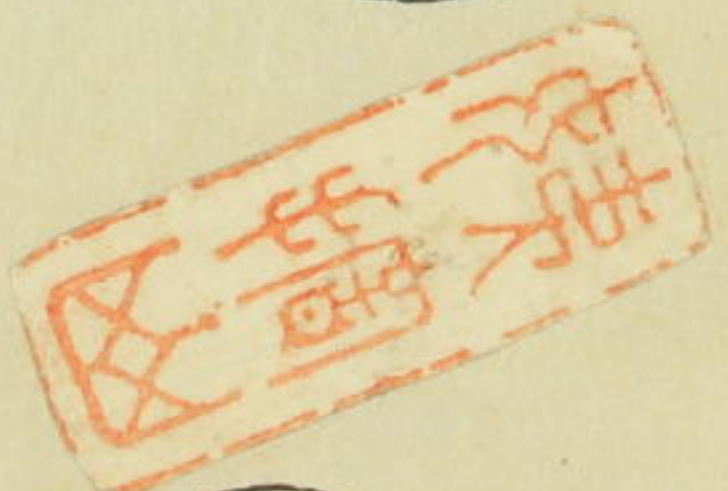
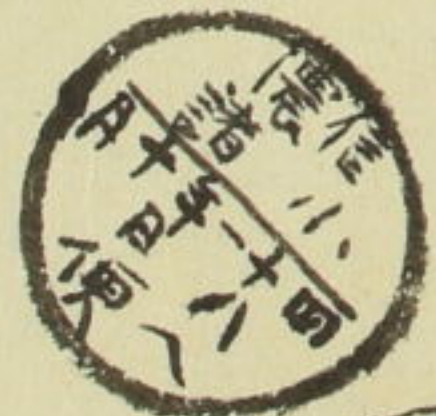
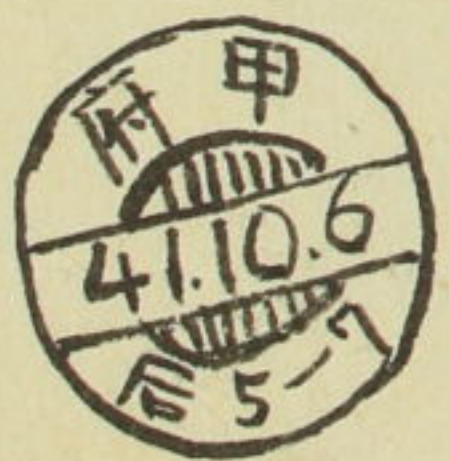
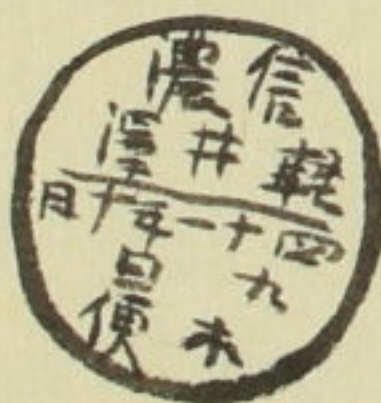
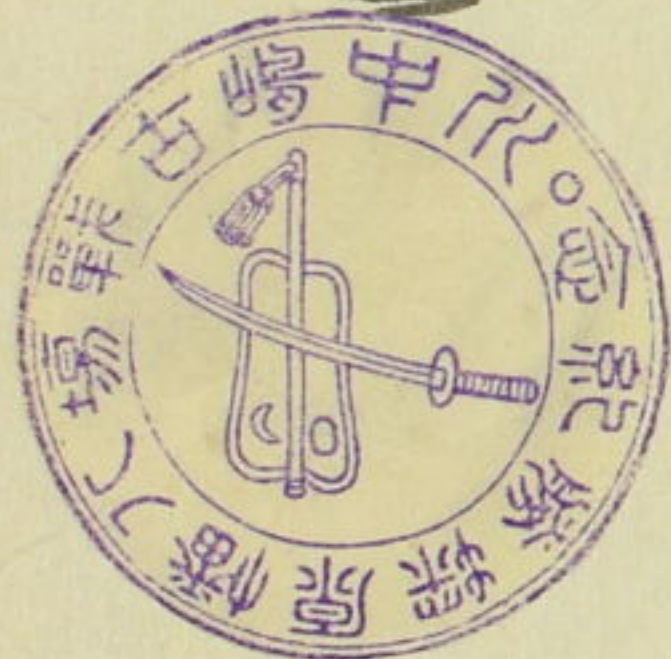
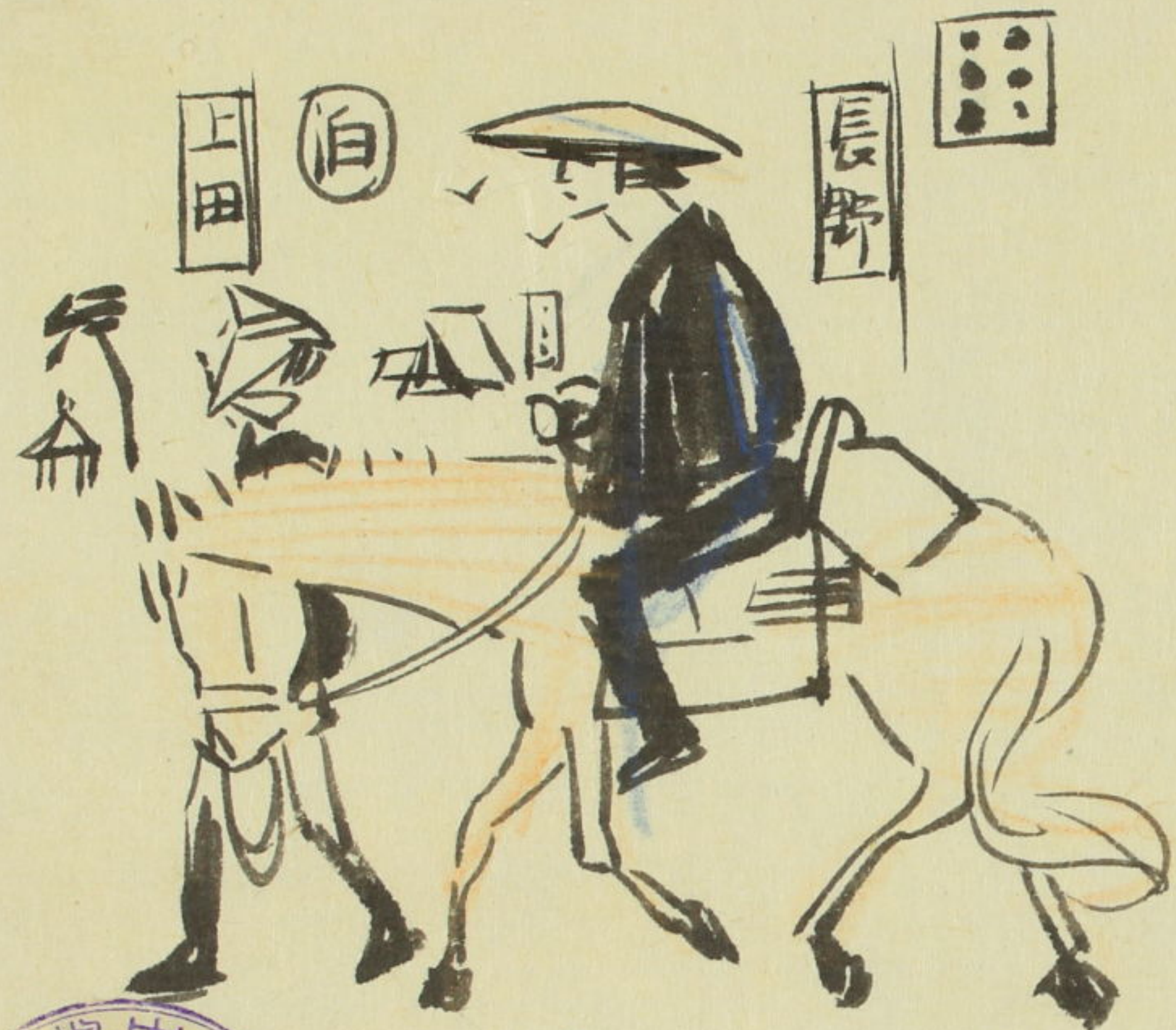
久保田夫編

特別  
^10  
7334



~10  
7334

<95-170>





晩秋の旅

- 一、武藏野より甲斐の國に。
- 二、甲府より長野まで
- 三、川中島
- 四、千曲川
- 五、浅間岳
- 六、碓氷越
- 七、碓氷川より神流川まで。
- 八、武藏野。

(明治四十一年十月)



# 晩秋の旅

一、武蔵野より甲斐の玉に。

都の空には横雲がたぎいてゐる。朝風が心地よく頬を吹いて汽車の右手から左手に抜けてゆく。空は曇り曇つてゐる。ちひはな、寧ろ秋の静かな朝にはよく見る水色の空に羊の群のやうな鱗雲が高く高く浮いていて晴やかな感じがする日であった。

汽車は武蔵野を西へと小俣嶺の彼方北相摸の高原より甲斐の國へと進んでゐる。

風は赤い透明な日光の糸を分けてあざし野を吹いて旅の人を送つてゐる。村々の櫓の糸は赤らみかけてその上に今出たばかりの月が照して美しい。

秋は未ば冷やかかほはなが既に萬の物はよの冷やかたな  
氣を帯びてゐる。杉木立も赤い。葉畑も赤い。大根畑  
も。南瓜畑の跡も。皆赤い。陸稲や粟の黄に熟した  
上には杉の木も長、長、影が曳かかてゐた。畑のまの  
楢や樺の並木のまにうすくぢすんだ地平線に秋の  
の出がわつかに認められる。

もう中野秋葉堂、吉祥寺、境國分寺と過ぎてゐた。松  
林が疎をなしていられてその赤い、すうすうと延びた幹に  
日が輝いてゐるのが朝空の秋に澄んだ中に浮いて、遠か  
の彼方に多摩川の河谷を距て、縣境に連る丘陵が  
見えて別に耕しもしない、草のまをひぢつた野のけはら  
に春香の草屋根の見える具を、なんとなく高き

俤が見えてゐるやうに嬉し。

立川の先でよりと渡る。廣、磧の中をささかたの  
やうにゆるやかに曲線にうねつて冷い、瘦せた流が清み  
ぎつて漸毎に白く泡たつて波と共に下つてゆく。丹波  
山の山も樺の深林にまよまよにこの自然の現はよの  
放縱の性質をゆる、河の輪廓はをんで秋の水の冷  
さが見たばかりでも感じられる。河原の草は枯れてゐる。  
秋、秋、秋は秋に限る。秋のさびしめと秋の清み、  
このやさし、この情が合成して、は詩が生まれる。やそ  
し、秋の詩が生まれる。秋、秋、秋の立つこと早き  
高原、美しい高原の秋、美しい中にも寂びがあらう  
けれど、赤や緑よりも灰色や白色を好み春よりも

冬を好む自分の心には淋しい高木の暖味はこの旅を  
と興趣多からしむるものに違なき。  
武川を渡ると日野の里だ。屋根に石を置いた山近し里  
の特徴が所々に表はれて山を好む人にも山近しと観念  
と興つる。右には御嶽大嶽からついた丘陵が低く  
枯草色して昔はんだ田に終つてゐる。  
箱田の一方の端には浅川の流が一段低く窪んですくもの  
岸から起った丘陵は神奈川縣と東京府の境目から遠  
く相模野の北まで延びて秋の澄んだ空に藍靨の  
色と美しい。

たの方から四角線が走つてゐるのは横濱鉄道の  
である。平行な二線が曲線の美を破壊して不調和に  
分割を行つてゐる。この鉄道は平原と山地とを連絡す  
る六支線路の一つなのである。けれど僕自身にはしんは只の  
鉄片に過ぎない。生糸を輸送しやぶがしまがどうせか  
の美しき目とともにも木と草と土とに見る人類共  
の仕事はとももよす。自分には汚れてない、自然があら  
はよい。

はま子につく石が屋根に乗せてあるのが、いよいよ多。  
かして山にたつてゆく。山佛あたりは山の侵蝕された  
水成岩の急斜面を見せて谷の隈に仕立てた杉林  
は度々の樹のやうに厚い。高尾山が見える。その南  
ふは北相模の高なるのだ。金堂塔のやうに尖つた  
大山の底に藍靨の神秘を色の中腹に氷よ



り冷、濡れ色した雲が迷つてゐる。

雲が近、山が近。山々の上の方には返つた雲霧がふつかりと空気にむらか出来たやうに沁みこんでゐる。浅川の停車場まで進むとからは、佛の峠に於ける汽車の両側の草生に秋の空を鏡に照して研ぎまかけたやうな色の松虫草が数知れず咲き乱れてゐる。黄の花をかざした山菊やせゆ花、紫苑、ふぢ袴、かぶと菊、草ぬき草した葉も美しい。

もはやここに至つて山の甲へ入つた。空の外はもはや曲線で満たされてゐる。涼々と山の隈を流れる谷川も心地よい。その冷い沫に軽くゆらぐ野菊も美しい。見よる嶺には真紅に燃えた檜が山の秋の譜に強

い一點を打つ。

セービーの笛についで隧道に入る。ハミ子つけた燈火が朦朧に淡い光を投げて人々の顔をぼんやり赤く照らす。暗く気の如何に人に迫るかは晝の光の強いつきと隧道を這つてゐるに限る。

才一の隧道を出ると又一段と秋が深い。山の上の方には寒の色に乾いた雑木がその赤い葉を風の吹くにまかせてゐる。谷の隅には淋しい山村が三軒五軒つ、所々に集まつてゐる。

才一の隧道を越ると相摸の玉だ。低くうねつた丘陵に小家が散点してその彼方に名も知らぬ山の雲を帯びて深い青藍色をして立つてゐる。山玉だ。



上野原

東海道の汽車で相模を見た人は撫子の多く咲いた  
 松の多い平垣な海岸の避暑地を聯想するであ  
 らう。けれども馬入川の鉄橋から北を望むと大山  
 から丹沢山に上つて山脈の尾を曳いて低く終  
 るあたり荒涼たる曠野が連つてゐるのをと見るであ  
 らう。北相の高原はそれである。馬入川が相模川と  
 呼ばれ桂川と呼はる、あたりにあつては高なの上から  
 地学的に見てもその一帯の荒涼の氣を帯びてゐるの  
 見ても純然たる高原である。その高原の北隅、甲  
 斐の群山に接するあたりを今汽車が走つてゐる。  
 いしかのトシネルをへて桂川の谷へ下つたが、このやう  
 に觀した。



自分は山が大好きだ。強じぬの程度を通り越して人の  
言にまよひ得る、或る感情を以て山に對してゐるの  
である。而して山を背景としたものはすべて好む。雲、空  
森林、湖、溪流、荒野、人類、すべて好まぬものは  
ない。山、一と水も、かゝる種類のも好む。アルプ  
スもよい。琉球もよい。今對してゐるやうな低  
山々が狭い谷を夾んでその底に清い流が見えるのも  
よい。秋色の見える草ばかりの山々、その中腹の雑  
草に立つた杉林、川の畔の崖に落ちる山の尾、低い山  
の美はそこにある。而してその美は秋から冬にかけてが  
よい。そこから種子の山嶺までかかる眺の中をゆくので  
ある。

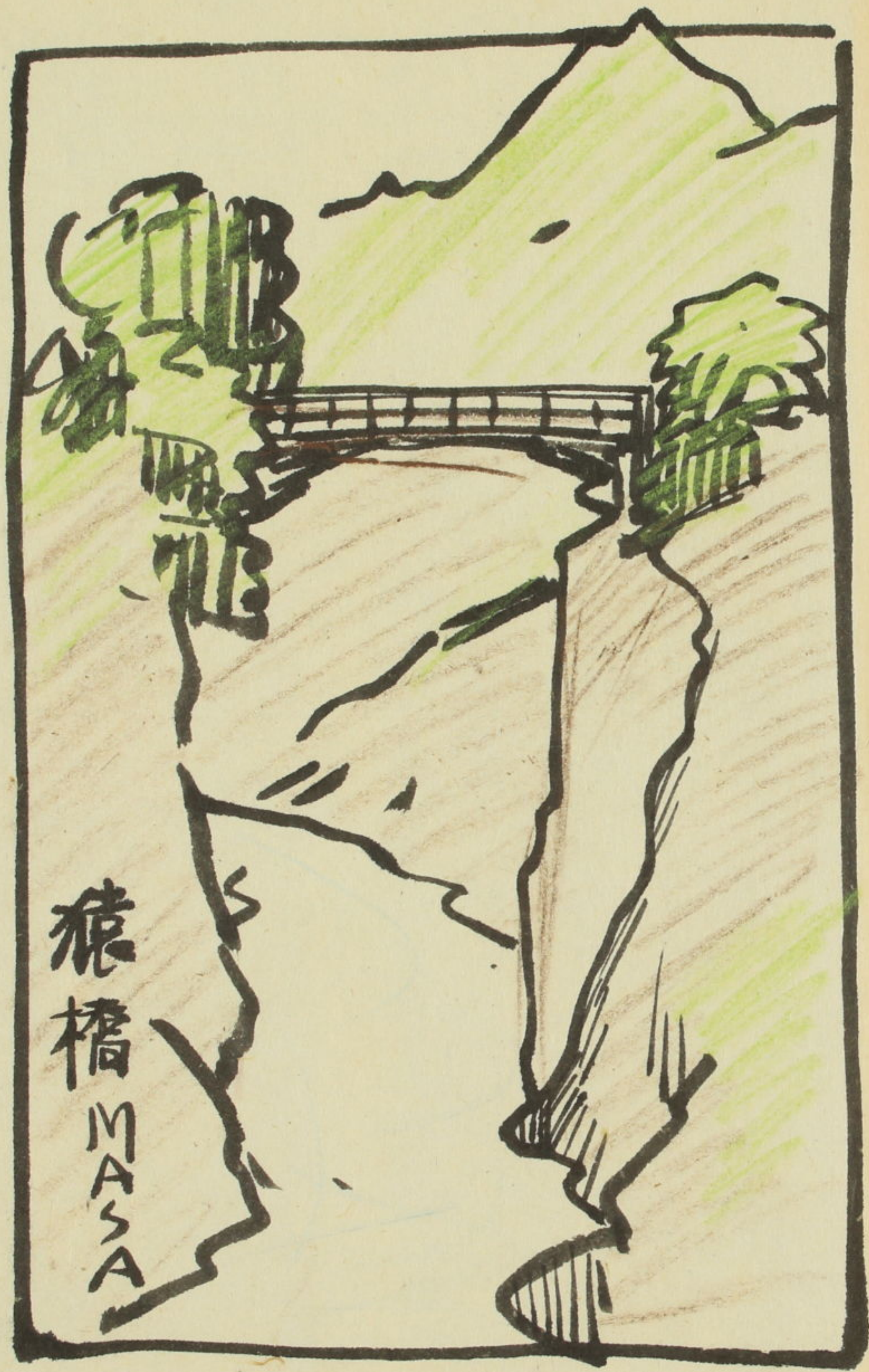
汽車は興漸々過ぎてからうたんたん谷の中へ分け入ってゆくので雲はよいよ近くなる。灰色したその雲が天を満して道志の山々も見えな。丹波山の裏も見えな。桂川の谷の美しい眺めも今日はや、カルーミは感々興々すべこの色が沈んで浮かぬ、重々調子が又山の曇りにと美の分子と加へる。

上野原を過ぎて溪の美を示す桂川を友にして山の甲へ中へと巨人の力に引かれてゆくと甲州街道の山を分けて来たのが近くなる。山里ツツ子の淋しい街道に人が晩秋の寒さに縮んでゐる。やうだ。

糸車が廻つてゐる家、玉蜀黍を挽く家、水車をかけた家、機織に忙しう家、家松に成鳥尾を植へた家、

山を分ける街道の趣多きはこれにも知れやう。今度、秋深き頃、街道つたい山の甲が歩いて見た、流して見た、上野原、鳥沢、と過ぎて桂川ははのめもの、~~山~~岸を進入びわたるが、いつか左岸に往つて水の畔に水車をかけた家々も見え。猿橋はこの街道が桂川の小なエルダを横切る所に架けてある。自分にはその奇巧な橋よりもその畔の村のさまの方が興々覚える。峡谷も小さい。利根上源の大峡谷などは殆ど比較にならぬ程これより大きい。たゞ人の知ると知らぬと多少所にもなる。

山々の間に岩の大きく露出した山が見える。山岩殿山といつて武田氏滅亡史の一片はこに残つてゐる。趣多



猿橋 MASA

甲州街道は歴史のけがらに散在してゐる。過  
 去と語る大寺の廢跡や戦国の當時国事に勢を振つ  
 た北條氏の遂に滅亡するの隙に花を咲かせた全  
 子城やこの岩殿山へ行手には天見山、酒折の宮など  
 時代は異にしても、つづら道であるその歴史の残  
 りもその背景は山だ。背景は旅だ。全早の調子は  
 秋加よ、かくして詩になる繪になる。  
 大月、なんとなく甲斐らしい名である。この辺の山麓  
 に水力電気の発電所がある。その餘流が遙か上から  
 流下するのが真白である。電柱  
 武蔵野の依、林樹の上に赤い林のついでゐるのはこの  
 電氣を都に送る線である。柱川は不二の慧から出て



桂川  
大月寺

東京に電氣を傳へ、横濱市に飲料水を給し相摸  
洋に注ぐのである。

こゝから桂川に分れてその支流の世子川について上る。  
甲斐にアつたと感何とは知らず湧いてくる甲州街  
道は相不変の路と平行である。寂しい街道の  
幅はおり昔の俵を見せて廣いのに一人の影も見えない。  
世子の山が迫ってくる。洪水の跡が傍に立見せると  
のまゝに残してある畔をゆく。河が埋もる石の写から赤い  
鳥居の先のみ見せたのや。石のころころと流さる下るに  
田の畦がわつかに見ると認められるのや。去年の洪水  
水が如何に激しかったかはこの下流かつこの田にかけての傍  
木を見ればすぐに知れやう。



その中に箕子の停車場へまてやがて隧道の中へ入る。この  
 隧道は通過に、八分五厘の長さであった。  
 箕子山嶺は二つの異った地方的特色の表はれた地帯の  
 境界線だ。武蔵野の西から北相の高原、郡内地方  
 ままで漲つてゐた積層雲はこの方面にたてはれ、めし  
 なる。拭つたやうなる牀の空に山と離れた綿雲が浮  
 いて澄んだ乾いた空気は、真青に、風は寒、けれど月  
 眩ゆく強く照つてゐる。一体この甲府盆地は山  
 が高く四方を限つてゐる爲に空気が乾燥してゐるの  
 である。故に箕子まては雲の波が寄せて来てもこの一帯  
 の盆地は美しく晴れることが多いといふ。  
 トニネルを止めた所が初鹿野である。山を切り開いた、



箕子

山の中へ、停車場ある。こから汽車は盆地の周囲の  
山の裾を傳はつてゆく。箕子の方から南へついた山はその  
先で御坂山脈に合して盆地の南西をたつて日の光に  
覆へてゐる。不二は見えない。甲斐の平原は実の色  
美しく撥かつてその先の方に甲斐のアルプスが人界を眺して、  
もくもく離れた色をしてゐる。

右には澄み渡つた目を満山の秋に受けた鴈坂山嶺から  
笛吹川の谷がながれて見えはしめる。塙山、日下部とすぎ  
て笛吹川の上流を渡る。松原の畔を流れた山の中への流  
が空を映して美しい。洪水の跡の砂に日が輝く。

葡萄畑が見える。  
勝沼や馬士も葡萄を合ひながら 芭蕉

の境へ入ったのである。けれど汽車が通るには馬車も駕籠も  
 ない。

再び甲斐のアルプスを見る。甲府盆地が雪隠た上に思  
 ひ切つて重く厚い波状線を描いて直立一万余の連山  
 を横つてゐる。空高くひそく巻層雲は巖にその七合目  
 位に棚引つてその白く流れた上に白峯の北嶽が屋根  
 の棟のやうな單純な一線に水成岩の大塊を包んでゆ  
 つたりと雲の流に動かず浮んでゐる。駒は見えな  
 が地蔵嶽から鳳凰山の尖峯は悉く天の領を侵して最  
 最なるアルプスの顔を示した。

この裾に沈んだ雪隠は七面山の方に靡つて赤石山は見えない



甲斐又平原の光に暮れんだ稲田の黄ろい色の中に野々とし  
と散在せる村々や赤土の元げた松山や葡萄酒と造る  
工場やとんぼ物の下を通りつ、平原の端から遂に甲  
府につく。もう午あつた。  
見える。

甲府らしくと西の方に茅ヶ岳の裾野が、~~なだ~~なだ  
らかな一線を空間から山々の波線の下に収ま下してゐるが  
枯草色に黄ばんで、状にして重霞の多い、空にくつきりと  
降立つて見える。駒ヶ岳は依然として見えな。  
停車場のすぐ東は舞鶴城の跡である。石垣の上に松  
が並び上つて枯れたものもある。その一隅を過ぎて、~~線路を~~  
横切つて北へゆくと帯那山の枯草色した下には影が、一かた  
まり集つて草枯れた野に紅葉したのも見える所が

躰躑ヶ崎の古城跡である。兵營と造りかけてゐるのを  
左に見てゆるやかな坂路と登つてゆくと右には大泉寺  
の杉の森林、山岩の信玄の塚、などが西栗山といふもの  
の背え下下に散在して過るを語つてゐる。

その下を登つて躰躑ヶ崎の館の跡に上つた。濠が水草  
に埋つて制札の古るびたのが一本その中に立つてゐる。館の跡は  
草生になつて楊や青桐などが山近き里の早赤らみ黄  
ばみ落ち葉は早も散り布つてその一隅には由ありげ  
な一構が古びて立つてゐる。落葉を檐に受けて香の白  
ふ家の長押には檜、雉刀、つく棒、長傘、いづれ年代  
とも殊<sup>（跡）</sup>跡の因果のかわぬものはな。彫刻白、老人が座  
つてゐるのは同じば昔を語るであらう。

五重赤の可愛い、四つ五つのは見やうな花が咲き満ち<sup>ち</sup>  
赤い楊の葉のと落ちるるを天守の跡に上ると秋の美た  
い空に山の上から離れて片々飛ぶ断雲がやめて大空に  
消えるのが人の命も歴史もこれと同じなると暗示してゐ  
るやうに思はれた。

舞鶴城の跡は俗話に化せられた。こは石垣もな。  
館の跡の却て感が深い。信玄も嘗てはこつ臺の上  
に立つたらう。その跡はかめそ目山は何等特殊の意義  
を帯びたなかつたらう。

館の跡の歴史はたゞその中の一構への長押に残つて秋  
ははや深い。

こゝへ出て山麓の信玄の塚へとゆく。田の中の道と

うねりうねり松の一材まへた一邱を~~●~~としてゆくうちにも  
の後へと遠りける。

場所

塚はたゞ信玄の墓を以て祭毘に付したに過ぎない、  
けしむ立派なる花崗岩を疊見でその畔に草花を植ゑ  
た一の境にならうとぬる。けれどついでこの間まは  
何ものもな  
いの野墓であつたとはかの戦玉の身兼雄の名残も哀  
ひある。夫人の墓もこゝにある。

こゝから要害山の裾傳ひに大泉寺へゆく。武田氏の誓  
提所で信虎の墓はこゝにある。杉木立の石に閑静な  
一字が静かに過か、山看目を受けて立つてぬる。信玄  
手植と云ふ白狐柵は黄ばんだ落葉を風にまかせ  
静に落ちる。

信玄の父、信虎の墓は本堂の傍にあつて三墓列んだ  
申の二つ。五輪の塔に戦玉時代からの墓が歴史と共に  
に厚い。胸のものは信玄一つは勝頼の墓と傳  
へられてゐる。眞の信玄の墓は笛吹川川上の或る里にある。  
禪寺の土庫裏には静に日が照してゐる。この境にあ  
は香の匂と共に過るの匂を嗅いで決して現在も  
未だもたない。過去の追想だけが胸に充ちる。  
石を敷いた日向の道を中門から三門へ抜ける。三門  
は由ありげに見馴れぬ形してゐる。兎に角歴史の香を  
信んでおて冷い。

又野道へ出る。甲府へ入つて再び舞鶴城の趾に登る。  
天主の趾にこそは今まで見た古府中や大泉寺などは

程近し見えて狭い甲府盆地は一望に盡きつゝ足  
の下には甲府の町が名残なく見えて世子から御政につ  
く低い山脈。甲斐アルプスの前衛たる低い小成山の山  
脈。甲府盆地の北を劃る山々、つれもその頂には雲  
を帯びて信濃境の高山も見えなむ。不三も見えなむ。  
アルプスも見えなむ。

この城址に立つて人の歴史にあらぬ。この地の歴史を  
憶ふ。太古には混沌たる中、原始期の町より存在せる  
甲斐アルプスは、その平坦な輪廓を帯びてみえなむ。知  
れぬ。が、不三もなむ。ハナカもなむ。甲府盆地  
もなむ。アルプスのあたりを残して他はたゞ水の湛つた  
るのみであつたらう。 後、海は干潟となりハナカは

不三まじ、二嶽の相對してその下に未だ人を生ぜざりし  
時、太古の本社ははその下に邸をたてて、寂として生物も  
なかつたとき、何と社殿であつたらう。 二嶽の字は  
やがて湖となり。富士川の谷をまいてから更に平原とな  
つた。 その時は未だ人はなむ。不三とハナカとアルプス  
とは別坐して無言に禪定せる巨人であつたらう。  
今不三なし、ハナカなし、アルプなし、而して低き山あ  
り雲ありなほ脚下に市街あり人の生活ありかく  
て昔の社殿は忘れられぬ。否、忘れられぬ。  
人は昔憶はぬ。  
空は曇りはじめた。  
城を下つて柳町といふのに來て依波亭旅館に泊る。

町から歟にゆく鉄道馬車が宿の前を通つてゐる。  
曇つた日の下で山が黒みつ、やがて山々の平原は暮れた。

(十月六日甲府松尾幸徳館にて)

三時半と云に起きる。空は曇つて小雨が降つてゐるらしい。  
今日もたぬであらう。いづれも見えまい。甲斐アルプスも  
見えまい。

(十月七日朝)

二、甲府より長野まで

五時四十分の汽車に乗る。今日は長野まで汽車は遅はれる  
のである。そのつらも晴れは日本の雄たなる山脈を見  
えなうはせぬであらう。曇つては仕舞ひだ。  
汽車は動きはじめるとすぐに町を過ぎてしまふ。田雨(と  
ると比には御旗の山が雲の下に湿つぽ、インカゴ色して

冷い雲の低く沈んだるにこれも冷く染まらぬ。美川  
の鉄橋を渡る。御旗は当面にその平霧の流に満ちた谷を  
見せてその下に積層雲を劈いて火をたたる奇峯の二つ峙つ  
てゐる。茅ヶ岳の裾野がたんたん近くなる。

龍ヶ崎までは稲田つっきの中を汽車が右に山々の裾を近く  
眺めたに甲府各地の手に握がつてゐるのを眺みつ、ゆくゆく  
ある。

龍ヶ崎にくると秀らぬ低い丘陵が平霧雲の満ち渡つた中へ  
と高まつてゆくのが田の端に見えてその形は一目して火山の  
裾野であることを知れる。金ヶ岳、茅ヶ岳の裾野である。  
ここから汽車はたんたん上りとなつてやがて切り割りの場所  
には火山質の砂礫や熔岩の破片などが見えるやうになつ





へ先に見た裾野の中に入ったのである。  
 今まで通ってきた盆地の光景とは全く一変して、西勢を背  
 景にした村が一段一段に薄れ、ゆるく緩傾斜の裾野に淋  
 しさうに立つて赤や白や茶などの瘦せた畑やその間に熟し  
 てゐる柿やすまて山のた持色が現れて来た。右には積層  
 雲が雨を合せて地に低れた下に甲府盆地が低く見える。  
 西勢の流の動いたび金ヶ嶽、茅ヶ嶽の裾野は、その間に陰  
 見するけれどもその傾斜の止むと途に一点に集まる頂は見  
 えぬ。  
 左んたんに高原的な様子が裾野の上に現れて来て赤松  
 の植林や、重層に混った状の草、高原の状は既に暖い。  
 汽車はしばし高原と平原の境を進んでゆく。

濡った雪は頭上数尺の低、所まで垂れこめてアルプスは  
勿論見えやう筈もな。ハゲ敷も、不二も。

輪廊のけつりした、雪である。晴れた日のそれとは厚く  
飽くまゝ小蒸しと氣を合せて直に雨と落ちそうなる重さを見  
せてゐるのは高原の旅によく見る所である。小淵澤あ  
たりから霧に會ふことであらう。

この日は沁みらく、甲信五岳の高原で雪の衣を解き捨て、  
あらはな姿を人に示した山はあるまい。はづかに、ハゲ敷  
連峰はその裾野の一部を、甲斐アルプスはその前山の  
本峰林に覆はれた急斜面かう難れた堆積土が裾野の  
中うには行かないが一種端美な緑と雪との多量な混  
り色のと落ちついた平原へと投げ下してゐる。見えおは

とれだけである。

鳳凰山地嶺嶽、駒ヶ嶽は雨雪の底深く沈んで何千年  
経たらこの世に生かすのが釋らぬ。

茅ヶ岳の裾野をこけて来た汽車は、塩川の鉄橋に上る  
川の右岸には茅ヶ岳の裾野を流が浸蝕して出来た  
灰色の大きな崖が長くつゞいてその廣い谷の奥の方には  
ハッポウの裾が波打った緩やかな傾斜で上へ上へと空中  
一萬尺の高さへと高まってゆくのであるが、見えるのは低  
く雨を持った積層雲の下だけだ。雲の中に動を入れた大  
火山はとれを見ても同じやうだ。ハの字に曳いた相對す  
る三線、何處から引いて来たかと思ふやうな大きな一線と  
何處から引いて来て雲の中に溶けさせる、一方からもその



通りは一線と大きく重と地の間に引き下すと二線が端然  
としてその間に目も逢かざる裾野の景が在る。嘗て  
吾根の旧道から不二を見た。四合目位から下は蒼々と湿  
つた冷たい色としてその上は重、重がかつて来た。その  
姿が、ま見ると之にそっくりだ。たゞ、前景が違ひその奥  
が少し違ふばかりだ。と見てゐるうちに葦崎につく。  
停車場の構内にフスマスが咲き満ちてゐる。その花も  
その葉も皆湿つた色としてゐる。富士見の高原へ行  
つたら無湿るであらう。  
停車場から往近、所に降る丘陵は七里岩の路  
端である。富士の熔岩流は駿河と甲斐の境から猿  
橋の畔まで流れてその上に山岩殿山をのせてゐる。不二の妹

ハケ嶽は信濃のむかうに、韭崎まで泥流を流しその上  
に勝頼の建てた韭崎の府中がある。姉妹の山はお  
揃ひの眞似をしてゐる。昔、甲斐の平原がまだ湖であ  
つた時分のことであるといふ。ハケ嶽と不二は相對して  
端美なり、截頭円錐形にし眞白な雪を頂して極めて  
よく似た美しの少女に一つは他の影で一つは影の形かと思  
ゆるばかり。常に美しの山は湖を距て、微笑んで立つて  
わたといふ。そのうちに嫉妬深き不二女はたんに己  
の影の鏡にうつてゐるのちあるかめくに對してゐるハケ  
嶽——その時分はハケ嶽と云はなかつたかも知れぬ——  
と嫉みはじめた。遂に争ひとなつて不二女はハケ嶽の  
頭上をその手に壞したといふ。その後ハケ嶽は若しの後

美た<sup>ふ</sup>少女になつて今のおさまとなつたといふ。この神話  
は多の二山の成生や甲府盆地の湖であつたことなどに關  
聯してゐるものもある。今はすべて見えな。霧  
が山と山を隠して恰かも世界は晝くアルプスを失つた  
やに思はれる。

ここからはかの七里岩に流れて塩川の谷を左にして彼方  
の雲に沈んだハケ嶽を見つ、高原の中と進んでゆく。  
高原の中に進むに随つて霧が多くなつてゆく。ハケ嶽も  
見えな、アルプスも見えな。自分のこの旅行をしたくも  
一つは山中にたつて壱子のトネンと區をてかつ甲府盆地  
地の西に幾々として天半にかゝる甲州アルプスの連山が  
見たかつたばかりである。その裾野の晴れやかな甲は何とな

し淋しい中に立って、いさか雄姿を見なかったからである。  
アルカス連立の天手に懸れる固い重たい厚いコートには最  
も自分の見たかったものもある。それか徳かな。山中のこ  
の行は何に意味がたくなつた。

落葉松が見える。枯草の中に松の葉が咲き知れ  
た野に風の吹き渡るむむ枯草の霧に過つてうたわれ  
たのど動く、その時、枯草を蹴立つるばかり一陣汽車に  
近づいてくるのは落葉松の林だ。もはや糸は褪めて  
黄ばんだ色に淋しい高原の秋を包んで空の外を流る、  
やうに通つてゆく。あまり大きいのが見えな、がそれかこ  
にはふさはしい。下きのは深山の木だ。深山に山男の鬚  
のやうな手務藻の青白、さふさふささせて美し、強い

風に星の光をゆるがせさうか、。裾野にはあまり大きく  
ない落葉松を疎い林にしてあちこちにつらつちにつらつと  
の隙から紫に暮る、山の輪廓の見えるたはは最も  
よい。

日野春へくる。釜無川の河谷は一面の事務でアルカスは  
勿論見えな、殆どこの世がう消滅しために見えな、  
前山をへ見えな、。

小淵沢へくる。日野春、小淵沢、富士見、茅野へかけて八  
ヶ岳の裾野があちこち打ち晴れた日には狂ひ咲の朝顔の  
やうに散れた群衆の緒くあらはに尖つたのを見えるぞ  
あるが今はその群衆のうたに見せな、裾模模たけ  
では地世の美姫もその勅を想像することは出来な、。



高原は実によい。殊にかういふ火山の裾野はよい。山に雲がか  
つたとき遙か下に棲む人類かゝる。するとこの高原には赤務  
が空気の有る所には雲が漲つたこととくに落葉松の葉末  
にも、楢の木かげにも草の枯れた上にも小さい野花の上にも  
すべてスペースとスペースを充たして赤務の中の何所からと  
もなく横がって来た高原が何處かつともなく高い方へ、  
落葉松のある毎に薄れて切れて見えなくなると、この境に  
棲みた。そして寒い、淋しい生活がした。色で壁をぬれば枯  
草色が灰色の生活だ。

霧に満ちておれた高原の汽車で窓外を眺めながら友人は  
抱き枕つた。けれどももし晴れたら如何であらう。もし  
晴れて天羊を劃する大少服が濃紫色に秋の大空に  
服と擽って高山の呼吸を裾野を過ぎる旅人に吹まかけ  
たらば心ゆく自分は今に狂したかも知れない。けれども  
心もよい。それでドイツの云つたやうに山が偉大なる感情  
の如くに思はれはよい。

そのうちに富士を見につく。白樺が見える。停車場の少し  
上の方に赤務の所にその白樺を見せる。山の裾野の光  
景はこの一本で活きた。山に入り高原に旅して白樺を見ると  
山はなるといふ観念、高原なるといふ観念が的確に頭に  
印象される。これは一度山に上って白樺を見たら人の常に  
経験するところであらう。

こゝは既に信濃だ。  
もうこの水は諏訪に流る水だ。富士見嶺から彼方の水は



助ヶ嶽の谷から出る釜無川にたつて駿河湾に不<sub>二</sub>の影を  
浴す水となる。此方の小川は御傍湖に流れて傳説の石棺  
を洗つて伊奈から東海道を遠州灘に島も通はぬと  
歌はれた。荒ははとある。運命は水も支配してある。

富士見の寒村をたに下ると昇早水田もある。西には  
赤石山の北端、御所平峠、杖突峠などが早草枯れた  
跡を見せて霧の窟に隠見してゐる。右にはハヶ嶽の裾野  
が一段をなして終つてその麓に甚だ美しく黄ばんで真白  
な幹に照り映へた白樺の二本三本美しく立ってゐる。田止  
ま丘に白樺を見るのは上州の片品以来である。暫しその丘に  
はかち甲しうち、落葉松の木の白樺は殊に美しく目を惹いた。  
丘の上には榎や樅の大木が山らし、木ぶりにこの高原の詩を

語つてゐる。

宮川の流はハヶ嶽火山の裾野と赤石山脈の雪を瀬も早く  
流してゆく。汽車はこれに沿つて諏訪へゆくもこのから諏  
訪の盆地である。湖が見えるかと行手を屢ばゆえにけいど  
また見えぬ。白樺の木を眺めながらゆくうちに青柳へくる。  
宮川の谷には稲田が見える。灰色した雪霧にはの見ゆるは  
杖突峠の草紅葉の色である。

茅野へくると大石川を渡る川上を望むと西霧が深く鎖  
してのたが偶ふふと切れてハヶ嶽の一角が凍つたやうに冷  
い紺色をして飛ぶ霧の窟にぬつと顔を出してゐる。阿弥  
陀ヶ嶽が御柱山であらう。雪を塗り時代を塗り  
その上にはははと塗つたといふ色はかく雪霧の絶るにゆえ

大石川にはホメウレぬ。かゝるとき人は草に冷い紺色の大  
 塊が見えるばかりだ。けれど霧の池の一角を見てもと  
 今にもその絶頂がたそなふて権現社から立料山とつくと大  
 石川の連峰が透り現れように見える。  
 大石川は恰も塩川がハケ社と金ヶ社、茅ヶ社とまなつた  
 に平務ヶ峰とハツ岳とまなつたものである。その上はハケ社連  
 峰の最北端なる不三形の立料からつとるものであるがそれも見  
 えり、平務ヶ峰も見えぬ。その中に平務は又漸やく満  
 ちて一冬浸んだ一峰すらも沈め、此の畝波をさへ残さ  
 ぬ。  
 茅野にゆくときは飯沼から南佐久の方ゆく夏沢峠の入り  
 口であるところ。停車場に天草の俵が積んであるのは皆飯



大石川  
 ハケ社  
 茅野

訪ひ寒天に逢ふのであると云ふ。

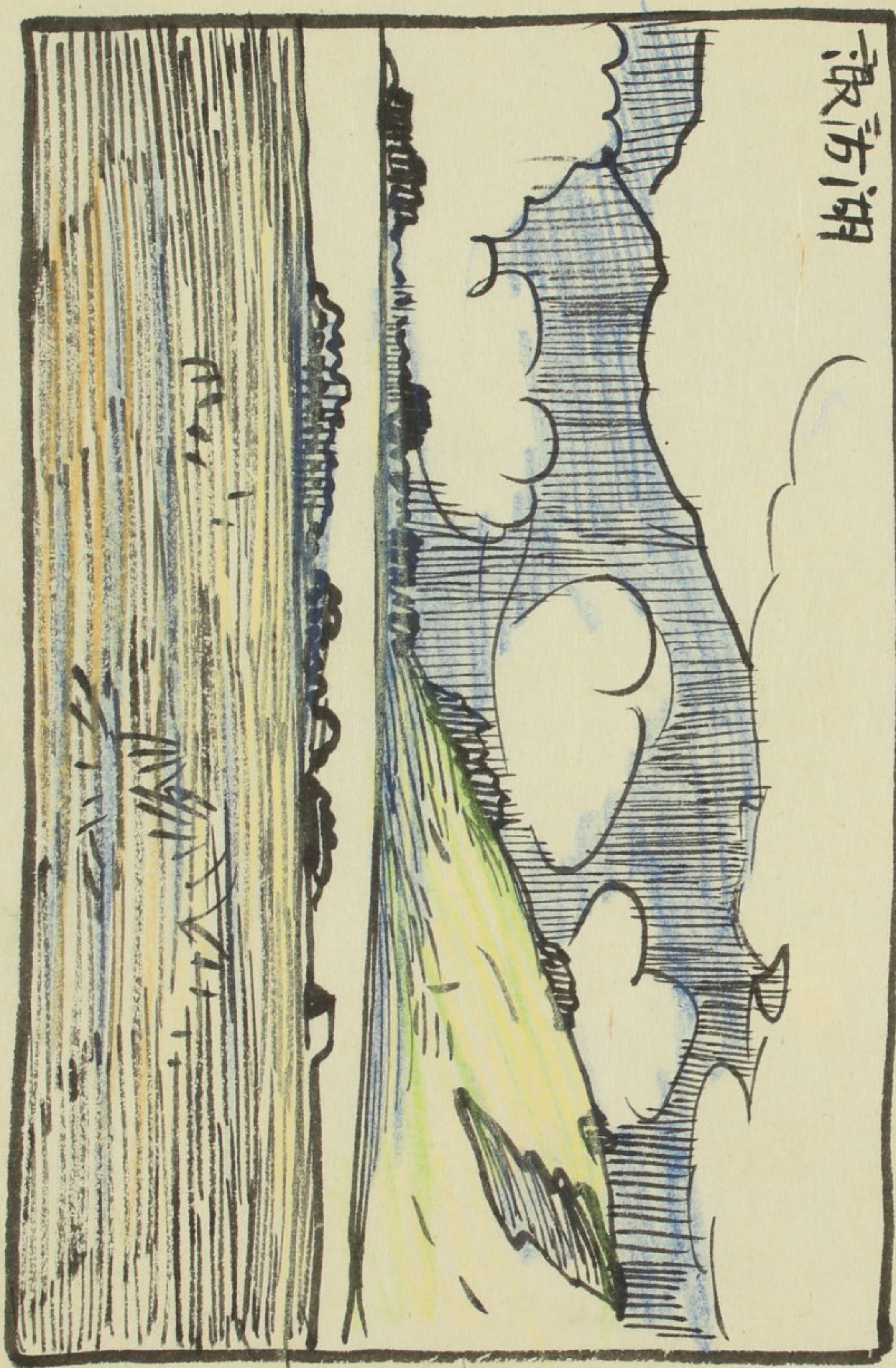
あんな人に諏訪が近くなる。もうこのあたりは昔湖であつたのである。昔はこの辺の水は南に在る山脈の東側から甲斐に流れてゐたのであるが、ハナヤの峠の傍に遮られてこゝに下る湖となり更に西南に溢れてこゝ龍川となるやうになつたといふ。

平地があんなに平に開けて黄に熟した稲田が山陰の村からあんなに低く梯田になつて官川の畔へ下つてそこから湖の方に集つて、諏訪の湖盆が用ゐられる。

茅野あたりから整齊な場式の白壁が山の陰につくられて村の町に見え、やうになつてこの辺は段々よりの村の所々に見える。細い煙突から煙の出てゐるものもある。

諏訪の湖が見える。霧はすゞこの色を冷しく沈ませる。箱田の向ふに鋼鉄の光沢を消したやうな色をして蒼蒼と人た色の山が霧を帯びてある空に光たて横はつこの霧の海は紡ふかたなき諏訪の海。その中に上諏訪につく湖は近くなつた。さうから見渡すと豫想した程よ、所もな。つまり山湖としての諏訪を地図の上で想像したのであるかうこの山々が繞つてはゐるが田がその畔にいつてゐるこの湖を見れば産面見なむ登た。やはり山湖は畔に人の無<sup>マ</sup>かよ。此の湖のやうに周圍に家が立ちつつけ沼<sup>マ</sup>瓦斯の昇る湖は厭た。つ田津主神が建御名方神と洲羽海に追つた頃にはこの湖も神話の領たる森林森林たる神秘的風景であつたかも知れぬ。

諏訪湖



なにしるるかゝ霧が下つてハヶ嶽が見えなこは諏訪はだめである。

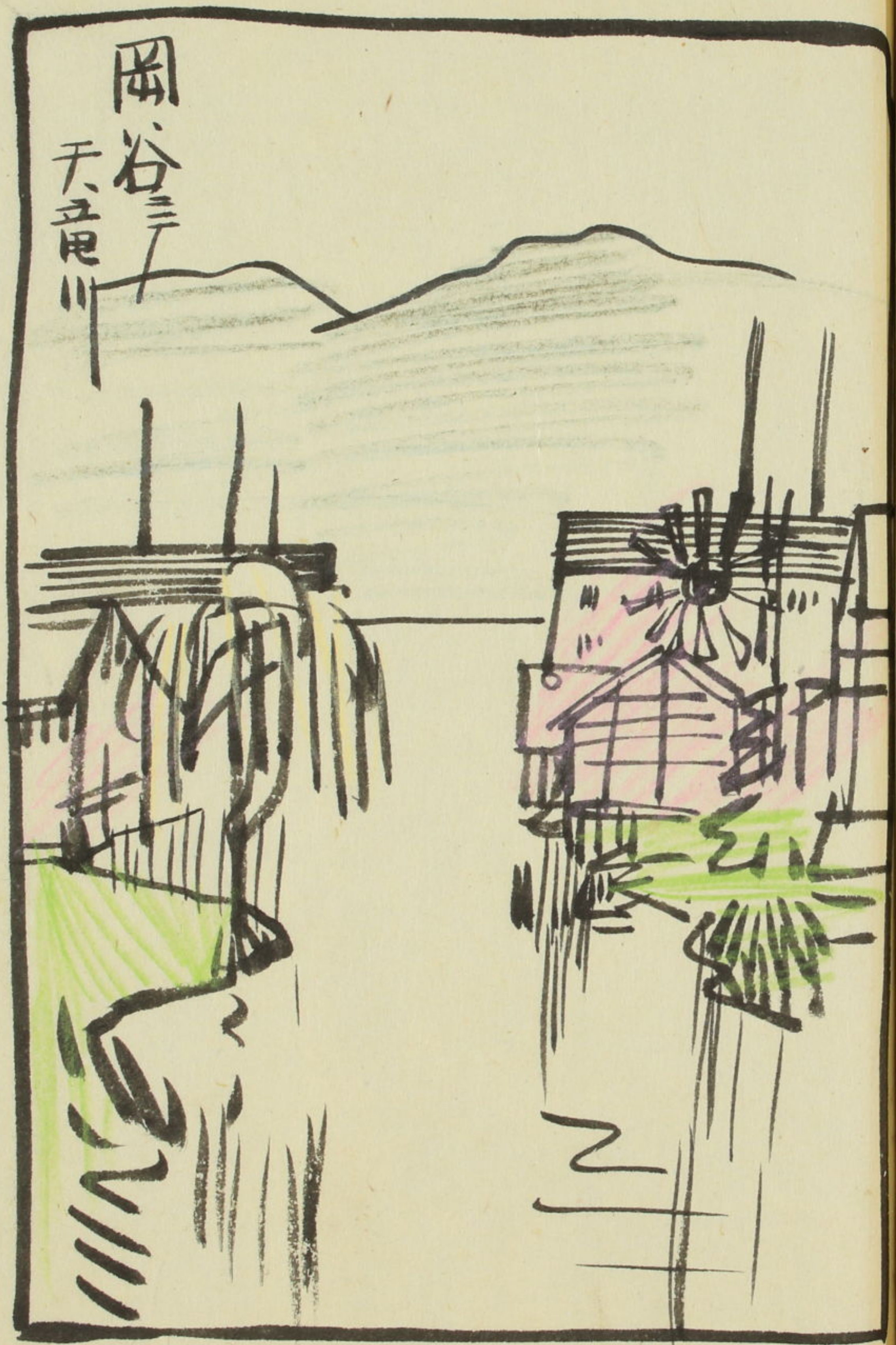
製糸糸場の煙突が湖を距てた岡谷あたりに細い針を植るたやうに立つてゐる。不景気な眺めだ。湖は昔は鳴大きかつたのであらう。この湖を繞る山々からは年々砂を流して湖を埋めてたんとしつくし深くすると云ふ。湖を匝る街道は、最近のもの、湖に最も近くそれより古いものは湖を遠く距たり上諏訪の山の上には極めて古き道の跡があるといふ。

湖を半西して下諏訪につく、中仙道はこの北の山々を越えて和田嶺からここに下つて又西へと塩尻峠を越えて木曾路にかゝるものである。流石に山はよりの街道は見ると影

も無く初産して昔の傷は残るもその上には皆歴史の  
荒れた寂かかっている。と云ふ。そんな字を旅して淋しい  
心に更に淋しみを増すのもいい。

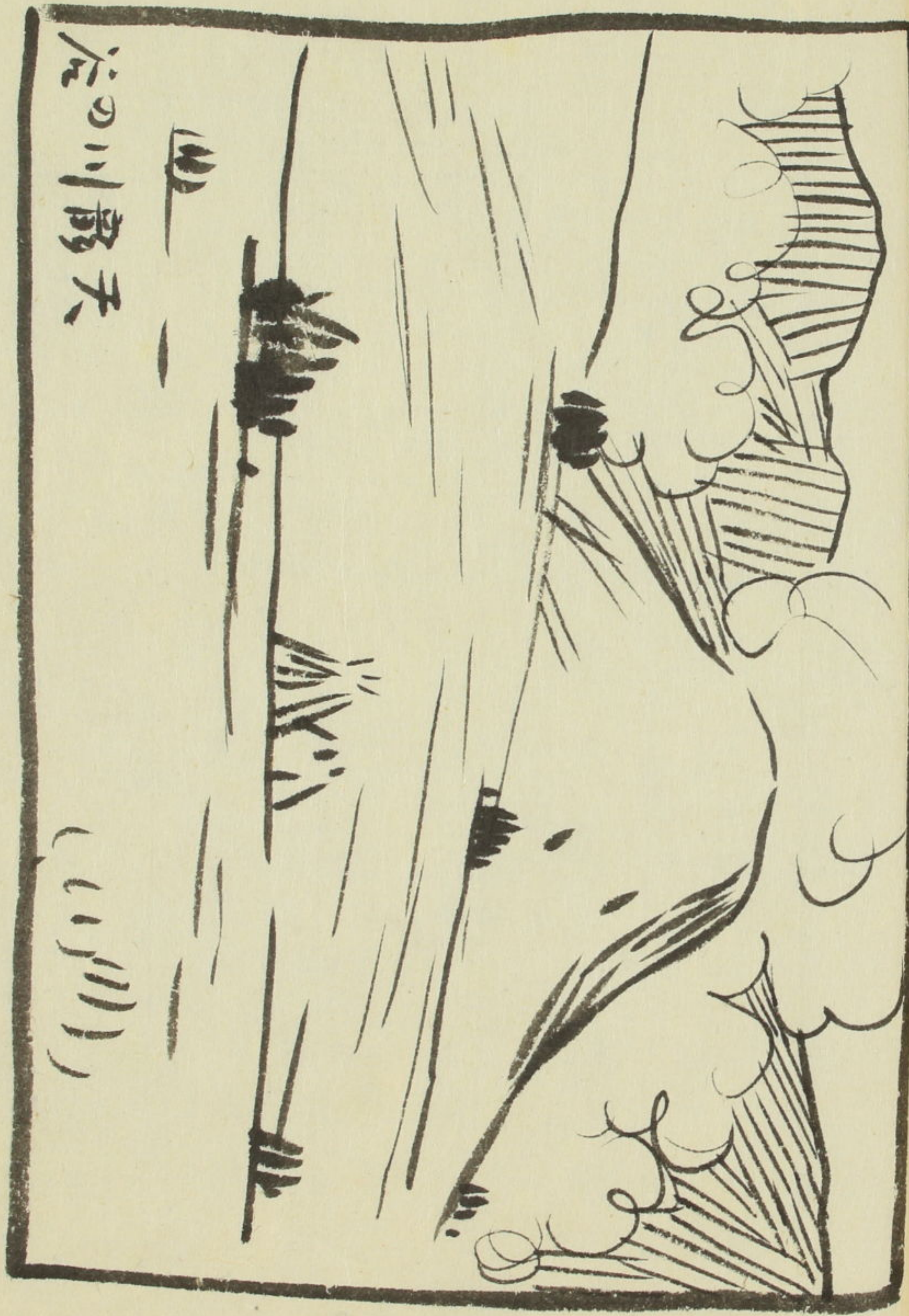
塩尻峠の山を右に湖を左にして汽車が進んでゆく。まだ  
未だハハ森が富士見峠をくぐらなかつたときから甲斐  
に通じこの右は湖の彼方に登ると段々上りの傾斜の上  
つとゆく末は手務の中に入つてその上の雲の中にはハハ森の  
連峰がハハ森の連峰の風に會つたやうに知れた峰々が  
いかにしく徘徊えとあるのをあらう。

岡谷の煙突が近づいて白壁が見えて湖のそばは近い。  
かかて岡谷らしく、日本一の製糸の町であるところな  
湖の畔川の畔何なる所にも小窓のいづれも開いた製糸工場



の白、霞が見えて細い煙突が立つてゐる。  
天龍の川にさしかる。冷たいな水がまた湖を離れても  
なつかうゆるやかに流れて、工場の煙突のかけや緑の穂め  
かけた柳の影を落してゐる。これがかけて伊奈の平を  
縦に下って、東海道の砂濱に出るのである。この一里を渡  
化はこの継谷について一たび旅行したら知ることか出来や  
う。汽車も暫くこの谷を下つてゆく。ゆやかに天龍は  
車道を右にたると狭い流に木を垣んだ、簡短な橋が  
架つて山をよと見る眺めとなつた。いつも川の上流に  
さつと起る感、大河の下流のゆるさを真摯する時の  
感、これかどうかに汽車の中から眺めながら起つた。いま  
まゝに見た川の上流、利根川系の諸川、阿賀川、荒川

多摩川、と小茅の上源に着るとこの山は感さ割  
 合に起さな。谷だ。伊奈は谷の脚だ。  
 南のアルプスの一脈、木曾駒ヶ嶽の一角が延びてこの谷に臨んで  
 める。狐色した枯草や紅葉した灌木が山腹を被る。こ  
 小が伊奈の谷から隠見する。左方には赤石山脈の末が同  
 しく赤石の谷に隠見してゐる。両方の山脈の末は、ゆる近  
 い。その下には田がある。その中に天龍の流と伊奈街道  
 と鉄道と三平の谷が捲り合はれて辰野まで。田には玄  
 年の葉ほつちが淋しく残つてゐる。少し前から降りけ  
 じめた雨は音もなく沁みるやうに降る。この  
 辰野から南は谷が廣くなるらしく見えた。甲斐駒  
 ヶ嶽の二里から発する三峰川、赤石山から出る小治川



だの川筋天

(いし川)



山に集るる白流を合せて愈々急激に東下りなると  
見の奇麗を發揮して流下する。龍の川は、川に両性  
があるとするはるに男性である。

三峰川の川上には父の御里、高遠があるのだが雨と霧  
とは展望を妨げて何も見えな。

鉄道はここで龍川に別れて一の支流につて又上りとなる。  
山は田雨の谷をたんと谷の中をゆくといふしか山野、  
辰野から流れて来た谷の流の細かなればなる怪山に近  
くなつてゆく。かくて上つてゆくと遂に伊奈と松本車の境に  
達する。ここで伊奈を顧るとやつぱり何もなし、雲が低くて  
雨の積に降つてゐる。

小野のトンネルあたりは西後凡そ4ノートン位であらう。

この一帯の山は太平洋斜面と日本海斜面、即ち表日本と裏日本の境界線である。隧道の中奥で小を流すとするは一は太平洋にゆき、一は日本海に入る。この小から長野へ出て小から碓氷峠を越えるまは信濃川の流域を行くわけである。

トニネルを出てしまつと松本平の高原が山嶺の西の麓から平野にかかれた日本アルプスの前山の麓まで積雪色に覆つて汽車はたんたんもろろに下つてゆく。

小野のトニネルから塩尻までは山地の鉄道にはよく見える山の斜面の中腹にシールが敷かれて、山の中央に森林の写るを切つたり、切り削ぎを扱けたりする。こんな風な鉄道と殺風景ではなからりには日光山の山に敷いたらば

よからうなと考へた。

塩尻につく前に山の斜面に林檎畑や葡萄畑が見えて来た。高原らしい、その作り方がいかにも嬉しい。その中にたんたん中央信濃の高原が開けて来てその中に塩尻につく。このあたりからは桔梗ヶ原ツツミでその間を逢うけく敷かれたのは中央西原である。なんたか二葉草の咲いた花のミハイロと思ひます。ミハイロが砂をうんで置いた化鼠車の上にゆんやり尻をついてイキナからワルソリまで大平原の中をゆく所と思ひます。落葉松の多いこの高原はロシアの平原に似通つてゐるであらう。

中央信濃のこの高原も、稚い葉は松の葉末に雨の滴がたまつて大豆、小豆、カトがとめるに突つて西栗の穂が

うなむれこめる。落葉松は既にこのも黄ばんで来た。若しこの雨も更にも晴れば彼方には日本アルプスの大連嶺が見えるのがあるが今日は何も見えな。村井を過ぎて落葉松や椎、赤松の百から西を眺めるとあるとある林の末を過るとき、日本アルプスの方の雲霧がと薄らぐので火に瀬のやうにとまじった梓川の傍谷の奥に雨にうすれて乗鞍岳が見えた。その梓川の源を登する様子は見えな。い。その他日本アルプス中最も最高なあたりは遂に見えな。千曲山脈は僅にその枯草色した少側を返りのたつかり谷まわりの雲の下に見せて冷や冷や加決ったやうに刻まれている。その下をくぐる女鳥羽川の流が見え初めた時は松平の町も見えた。松平城の天守も見える。



松原

雨は絶えず降りしきつて所々の山々も見えない。浅く温泉のある谷には厚い雪の風に吹きさらさらした軽雪の一片が濡れ色して流れてゐる。

松本も雨に過る。ここは母の御里おけいど訪ふたことはせい。松本から田澤、田澤から明科につく。

山里の停車場には人一人も見えない。外に明科館とれりかけに宿の具舎、人家のさま、如何見ても山地の停車場だ。有明山に六里とある。中房一三里、田澤アルカスは近。

この鳥川から出ず花崗石が停車場に積まれている。田沢のあたりから梓川は車の傍にあった。それに木曾の北から来る奈井川が合して梓川とあってそれへ橋とた天井の古からくる高瀬川と合して寒川、青川、高瀬の流とな

る。  
若し日本アルプスが見えるときは不三形した南明山から  
蝶ヶ岳に上りて大層風の上に大きな肩を登りやがた大天  
井嶽(三二五)やその南に高麗な三角形——ウエストン氏  
はこれよりエイシホルン(アルプスの一峰)に譬へた美し三角形  
さる奥白な雪に一際気高くそ増して緑めあつた針葉樹の  
大森林のつから天へと延びた絶巔は常念ヶ岳(三三四)  
その常念の左肩には日本アルプスのマニホルンと呼ばれた  
槍ヶ岳(三〇九四)の尖峰と水からついで潤い肩を登りや  
かしてゐるのは穂高山(三三〇)かくて冬がはやも来たアル  
プスの全景は白き寂寥多の大處であらう。  
けいど今は雪霧がある。小川がある。僅に見えるのは前山の

裾をかけた。その下の安曇の高原をかけた。  
かゝる雲霧したのは西條へつしまのつらである。  
西條の手前に白坂のトニネルがある。かなり長い。こゝを越すと  
西にはまだ犀川の高原が見えるがたゞん向へ4曲川と犀川と  
のつらと劃る山——或る人は4曲山脈といふのの中へ入つてゆく  
のである。澄々松が所々に林をつつてゐる。低い瘠のや  
うな山々、高所に時は白樺も見える。全体に草も亦も赤  
らんでその間に褶曲のたゞしく、路は小た水成岩の層が所々  
に見えて山石のつらと冷い山の水が流れて三富士見の本見  
えむかつた松と雑草や、薔が咲き乱れてゐる。  
炭山でもあつたのか赤松の林のつらから針金に籠を吊し  
たのが低い山から谷に渡って架つてゐる。

雨は淡められた山地の下をたぐり上つて隧道を三つ四つこつて麻績にくる。冠着山はすぐ近くに登えてその頂の山も樺の木立が黙々として折々霧をかかれる。雨が少し降つては雨たが近かつたその中腹の難から南に昇いた尾根が、この夏の道を通るに信じてはなす。猿ヶ馬場峠のトニホをのぼると直に懐しい、千曲河が見えるのである。その隧道は冠着山の西の尾に通じて直に狭尾にくる。狭尾にくれば千曲山脈のこれは既に千曲に面した方をその山腹に汽車が通じてある。

この停車場から晴れた日には七の停車場を遠望し得ると云ふほど雲では見えな。

遙かの下の依地には千曲川が廣い、白、帯のやうに碇はつ

てかの河畔の一週に見馴れた山や、丘や森林などが一望の下にあった。冠着山の東の尾が峰に松並木を棄せて中曲の畔で終つてあるのが見える。その下にはとこい一週をたどつた更料の里がある。その一つは左の家がある。停車場から少し左の方には狭尾の石がある。観音堂の屋根が見える。観音の名所はここ千曲を距てた山は鏡臺山で、この山の梯子田にうつると奥田になる。うた。けれど実際の狭尾山といふのは彼等の冠着山である。縮着山を過ると下の方に信越線のレールが見える。その二駅とこの二駅との間の差がたぐり少くなつて二すぢの線路は遂に平原に下つて篠井の谷をすす。

縮着山あたりで雨は止んでこのときには薄曇りか曇り

めた。そこから左は千曲山脈うつぎで右には廣い川中島  
平を距て、インゲン色に透った山の色が低い雨雲さかぶ  
つこうねつこめる。草津白根も見えな。三姉妹の山も  
見えな。

屋川を渡る。千曲山脈のその畔に迫ったあたりに流紋  
岩の大きな雨路をが真白に雪のやうに光つてゐる。川  
中島の平原を距けた松代あたりの山は今し雪と薄  
で草の草は枯れた峯に薄日が照つてゐる。

その中に根花川をたにして長野につく。こゝも雨が  
降つたのであつた。停車場の前の狭い所は泥が  
流れて渚方の田舎から集つた共進会見物の人や  
小学校の生徒などが沢山あるてゐる。

宿屋がこの辺から既に立ちつゝゐる。善光寺まで  
は狭い通がついてその両側には二人や種類の町の  
通例として宿屋と名物を賣る店などが立ちつゝゐ  
る。その道の狭い通には電燈の線が沢山引かれて  
ゐる。共進会見物して人が至る所にあつてゐる。

善光寺につく。こゝにも電線が多。は寺の中にもまで  
通じてゐるのは忍草の外ない。寺の右の方に共進會  
がある。白漆喰で塗り立てた建物の寺。ぶらぶらして  
會場のはつちの屋の上にする。善光寺が一目に見え  
る。すぐ下には北玉街道に沿つて立ち並んだ信濃式  
の屋根が見えて木の木立がその特有な緑色さけの  
木の石に見せてゐる。旅人の人があつたやうな長街

道のついでその両側に立寄つて家並にその地方の特色  
の見えるのを眺めれば殊更に旅の情を深めるであらう。  
其進宿はさすがに着る玉で閑いた大あつてこの部は  
振つてぬるやうであつた。教員も居るが白馬  
赤中浮石の摸型を見る。その他はさして興味を  
持たない。

長野は善光寺の持つてゐる。信州にはあるが山をうし  
の所、高原地らしい所はない。薄汚ちい低い山がその  
後立つて三姉妹の山は一も見えない。信濃の香うする  
のは香たけた。

(十月七日、長野、東洋館にて)

三川中島

長野の町を立ち出たのは朝の湿りの多い風の吹く頃で  
ある。古戦場を市にはかき日がい、うつつり雲がか  
つて地には雨期によく見る厚い雲がかつて折々雲切が  
して湿りの多い風が白く光る鼠色の雲と色の落ちち  
つた稲田とあるを吹いてゆく目である。

善光寺道心の寺の前を下つて、杏やマルトロヤカリな  
と信州に多い、さすまな果樹の茂つた村のふるまを  
みてゆくと折々長野へとゆく人が打を連れて廣く田圃  
に文字に曳いた界道を長野の方面にゆく。  
自分は銀灰色に光る雲を破つた山こや、平に播かつて  
見渡すかきり田の面の黄ばんでその間に黙として村の





在すよよと見ながら丹波島村へとゆく。  
 やがて煤花川の堤防が見えてその中に原平川に架けられた丹  
 波島の長橋にかかる。橋の上に立つて川上を望むと姓  
 として冠着山から連つてくる千曲山脈の所に流紋岩の  
 露岩が真白に光つてゐる。その下の村には木戸の跡も  
 わづかに此所からもそれを知れる。  
 その連つた低い山脈の間に狭い谷が開いてゐるわけこの  
 原平川の谷である。煤花川が三姉妹の山——飯綱、高妻、  
 黒姫、——の下の水を集めて流れてくるのも見える。  
 丹波島の長橋に立つて川中島と望むと向うの西條山  
 つきその高みには雪かかつてゐる。此の方から朝風に  
 柳の動く堤に立つと板の長い橋が明るく照らしてゐる

のたはけ自ら河畔の感も深からしめる。

渡り終ると川中島だ。丹波島村に入る。松代あたりを眺めると山をば雲かかぶさつて眞青に濕つた色をしてゐる。

いくつかの村をま回ると皆土色した壁に、乾いた色の茅葺、杏を植ゑ込んだ村のさまなどこの夏の数日を暮した千曲の畔の村によく似る。そしてその土の色やすべりが河近の沖積地の平原によく見るとまである。

松の茂った社の前や榎の木を植ゑた村の写るま回ると田の面の同じた所へせるところは既に川中島の古戦地である。



清角豊後守の墓か道の側に寂しく立って両将軍手槍の  
 松といふのは未だ稚い。写もなく八幡原にくる。甲越直  
 戦地といふ碑が立って道を迂して松原の中に社がある。  
 その辺のさまが別々他と異つた所は無ければ聯想は總  
 べて古戦場にしてしまふ。  
 社の近くにこの繪はかきと書る家があるところ人が  
 詳しく戦について説いて笑れた。ここに立ってぬると信玄  
 の陣した茶臼山、海津城、謙信の陣した西條山、象山、  
 皆見える。両将が直戦したと傳ふる八幡原はこの  
 林の東、千曲河畔にあつてつ、此頃まで八幡原であつたといふ。  
 としてそのの茅の先が切れて鋒のやうになつたものもあるといふ。  
 これから信玄の命に替つた、武田信繁の墓がある、典厩

寺へゆくその途に山車勲助の討死してとこでもの首  
を胴に着いたと云ふ朋合橋がある。小流の葦の風が鳴る。  
桔梗の原の合戦に手柄功名しかつてこゝで命を終るまで  
勲助の一生も短くは思はない。

典厩寺の信毎の墓は木立に隠されて古びてゐる。野  
寺に上ると見る乾いた土の庭から本堂の屋根と見ると  
大菱の定紋がつけられている。古戦場の空気がこゝにも満ちて  
ゐる。

寺を去つて千曲川に架けた危い橋を渡つて横に野道へ  
切れると茅の葎からやがて流の跡について海津の城跡  
へくる。

石垣が冷たい色して所々に残つてゐる。城の跡は松代町の



遊び場になつて自轉車の競走が始りかてみた。  
 石垣の上によつて見渡すと一と通りこの川中島の古戦場  
 が見晴らさる。茶臼山は一辺の平原を距て、低くうねつ  
 てその上に點々として草木が見える。西條山は松代の  
 城の方にある。少々の低く尾を曳いたあたりをその尾のつ  
 くに象山と云ふ山がある。堀の畔の蘆がさわさわと鳴つてハ  
 情ななうへに流つた風が吹つてゆく。ここからずっと丹波島  
 の方も見える。長野の百長の山々も見える。飯綱はその  
 の中腹以上に積層雲を纏つて赤ちやけた山腹は雲  
 に隠れて見えなくなる。一度雲仙寺の峰が見えた丈でその  
 頂は遂に仰げなかつた。ついでに隠れも少くその山頂を  
 表しかけた。

長野市の北にも少し、塊状火山が一つ見えらる。これ等は  
すべて富士火山脈のものである。松代の北には草花かけた  
山がつかつてゐる。これが那須火山脈の終末であつて中には  
明らかにその塊状火山であることと示してゐるやうな形のもの  
ある。善光寺平の沖積平原はこの二山脈の間に田の海  
を湛へてゐる。

て心暫し佇む空はすまし晴れはじめた。城址を下り  
て松代にいく。松代は物静かな寧ろ淋しい町だ。旧村は  
一藩を置かれた所であるが寂しい茅葺屋根がつかつて  
以祭があるといふ所に淋しい。軒の柱には大方青い。  
こけかの悠久で象山先生の生地である。家々で蕨を  
干してゐるものもある。糸を引いてゐるものもある。



聖切かし初めた。西條山に行く。松の生えた丘の上より  
 ついた頃には全く晴れておた。丘の上には維新の際に死  
 んだ物の招魂碑が立てある。中々眺望もよい。晴れ  
 は晴れたがまだ飯綱が見えない。之隠は見えない。妙  
 高も、黒姫も。  
 山のあたりには真白な摘み綿を集めたやうな雲  
 がふつかりとか、つて纏れもつれて雲の包が解けやうと  
 して解けた。中の山が見えさうで見えない。  
 此の夏更科の里から眺めたときの並置なその火山景  
 の儂才浮べる。  
 美しい、不二形した飯綱から奇抜な形に似た戸隠の  
 真山、その下に出る妙高、黒姫、その時はたゞ青かった。今

その赤らみかけた連翹色の秋が見たい、澄んだ空に浮  
か山が仰おたい。

丘の上で晝飯をたべて丘を下った。桑畑の道を通って  
松代から條の井一箇ふ平道に出る。雨宮渡の跡の假  
橋で再び4曲を渡ると打ち晴れた野に更科の山  
山がたゞく従えてゐるのが見えはしめる。冠着山がまづ  
目につく。

ついで埴科郡にはなつてゐるが更科の里から程近い山  
々が見える、一箇道の記憶を止めておいたあたりを悉く  
思ひ浮べるとある町の心地を思ひ出す。

振り顧ると西條山が4曲の彼方に幸島のやうに平原に  
突き出でゐる。



一平路を向ふに見える駅を目前に篠井に向つて進む。

### 四、千曲川

篠井駅も可成りに雑沓してゐる。つゞいても長野の共進會の  
ためである。ついでときには甲府ゆきが今出る。下原のあつ  
た。人も多くと乗せた電車を見ると昨日自方集の才太  
所と逆にかの高原や谷や湖畔をゆくのだなと思つて  
一種の感が起る。

二時十五分より列車に入る。これからは千曲河原の  
高原と汽車が行くのだ。かゝる今日の暮る、頃には北  
佐久の高原に立つてその美しい晩秋が見られるのである。  
やがて汽車が動きはじめると懐かしい更級山かたんの山に  
近づく。

善光寺平の平原をゆく中に屋代に入る。その間に千曲の  
鉄橋を渡る。川中島あたりで見えたやうな狭い小川も  
ではな。これは潤い、碓の中にも三筋三筋と流す水も  
流も早く瀬筋が白く立ってゐる。その中に平た、早瀬を  
下す舟がつかれて瀬が張りきつてゐる。

北玉街道が窓に近くなる。茅葺の古い屋並が立ちつ、  
いて杏の木が葉が黄になつて落ちかけたやうもある。柿の  
熟とめる村もある。屋代を過ぎると窓の左には  
鏡ヶ山つゞきの低い丘がその上まで山畑がつくられてある  
丘がすぐ汽車の線路の近から起つてその所には杉  
林が立ち上りて耕す小ぬ所は紅葉した色も美しい。  
右には北玉街道の廃驛の遺の脱けたやうな不揃

な屋並の間から更料那の平原が見える。その中にかの冠  
着や姨捨が愈々近くなつてその平原に曳いた尾根の  
一つには見覚えのある松並木が、その峰の上に黒くその  
下にある一村はこの夏の緑が、さきほど見た左豊城君の  
村である。その幾白かに見馴れたものの、いづれも今はそ  
の時の緑に引きかへて、秋の色を帯びてゐる。今、家の  
前の山々は、その時午曲を距り、眺めたそれであつた。  
遠く、姨捨駅のあたりには、白い煙がなびいてゐる。左刻の  
甲府行であらう。  
三倉温泉の傍を通るともうかの村は、八王子の峰一  
つもの松並木のある尾根のかけになつてしまつて、此度ゆゑ  
の此方の山田やカ石のあたりが眼に入る。

冠着は一変してその急峻な斜面を見せる。それについ  
て名は知らぬ峰々、いづれも草紅葉した色は美しい。  
まだ汽車に並行してゐる、北玉街道を見ても、林しい  
道に極の松並木の、遠くまで舞つてその木かげには、寒げな  
色した家々が、まは閉めたものもあるし、開けたものも、街道  
の側には、並んでゐるばかり。そしてその下には、冠着山邊  
峠所の石塔や、峠の渡の、たど入りが、川の見渡せる間  
隙を、つとつとゐる。  
思ひ出すと、曇つた夕であつた。友の家を出て午曲を渡つて  
三倉のこなたまで送つて来て、呉れた友に別れて、阪城まで  
この淋しい北玉街道を辿つたのは、そしてこの極限の  
あたりから、かの冠着や、そのつとつと、その山と、望んだとき

暑うた夕にその山には薄曇り暮れかけたおた。そして  
 冷くむせぶ4曲の瀬音もすむてゐるといひれぬ淋しみか  
 寂れて来た。そして塵の白くさう街道を孤影悄然と  
 して坂城の駅にたどりついたのであつた。  
 その夕は実に薄曇りかつた。その薄曇りはたゞの暮る。時  
 の閑さではなかつた。

葛尾山の下を通つてこの山を、歴史や村と義清の  
 妻が逃れて4曲の流す夕暮に越えて水人に笠を思ひた  
 とふ笠の流すやとんたことなと獨り思ひつた。  
 坂城の駅につく。4曲は、駅の前を流れてゐる。冠着  
 山はまるで月の影になつてゐる。  
 此の方には4曲の末に峯の松並木の終つてゐるのが見える。



冠着山より





馬城  
牛田川  
MA



三曲  
城

4曲の川上を見るとき坂城のなるの山のつっきが河の畔に  
終つてなる彼方に保福寺の領の分れが銀やうな形に起  
仕つてその澄んだ秋の色にすむに比佐久、小縣のなる原の  
美をさま思はせる。

秋の夕が丘んたん美となつてゆく。坂城を出てしばし行くと  
川のさまが前と異つて積が狭くしてその畔に山が近いよ  
うなるの川に見る眺めとなつた。埴科郡を出はつて小縣  
郡に入ると今までの谷の眺めがや、開けて小縣の谷地が展  
開された。西には保福寺峠のつっきが青々と日に赤んぼ  
の影方には雲が迷つてゐるらしい。となたの空にも雨及  
のやうな雲が浮んでゐる。南には諏訪とあるに踏つた藤  
科山、大門峠の峰々が雲の中からその美しい裾野を



底荒してゐる。その傾斜はすっと千曲の畔まで及んでゐる。  
 中には浅い連山の裾野が日に照されて美しい、枯草色し  
 てその上には雲の陰影が動いてゐる。鳥帽子嶽の峰も  
 見える。その赤く日に照らして頂上は秋の空に浮かんだ  
 やうに美しい。  
 千曲河畔の高原の美は始まつた。  
 屋代からついでに女衞街道に沿つて汽車がゆく、その  
 中の上田の古城を見てやがてその上田につく、例の白壁の  
 製糸場が見える。  
 古城は火山灰積の屋の上を石屋また、人々でその上に荒れた  
 白壁が薄く目をおぼえてゐた。その邊は荒れて杉の葉  
 に鳥が鳴きさうであつた。



上田からは高原の眺が愈々深くなった。

実こそ昔はんだ緩傾斜の梯子田の末には千曲の清い流が  
流々と流れてその征方には和田峠の連脈 車まで紅葉し  
てが、日の影は紫を潮して美しい。

日は徐に夕になつてゆく。日の光の最も美しいのは秋の午後  
西に動いてつれてやうやうに光も弱くや、赤らみかけたまゆ折  
である。その時の光の秋の野に投げられるのを見るときにつく  
づい誘はれるやうな秋の寂しみを感じる。  
今からいふのである。

鳥帽子森から三尾根山までつづく古い火山の裾野は見  
渡すかぎり枯草色に延びて末は浅むらの裾野と合し  
て比佐久の高原の中の最も高原らしい、部分をつつて



めるのであるがその大高原の上に傾き初めた秋の目が弱く  
 赤く照して上州の方から流れてくる雲にしばしばその頂の  
 日は陰になる。その高き河野を近づくと梯子田にな  
 つて収穫の農夫も見える。  
 赤く浅くは見えぬ。空はもはや秋のやうに美しい  
 秋の色に碧高く澄んで地の物も天も等しく透明な感  
 がある。  
 大屋につく。4曲と浅くは此の辺からこの高原の旅に左  
 右に排列されたる自らの美と力の発現として常に相對  
 して眼に入るものとなるのである。4曲川の左岸はこの辺  
 から屋が立ち露れはじめてその屋の上から今晴れた空  
 斜め美しい山巔までは何一つ遮るものもなし、一望の高

原である。その中程の所に炭焼の煙がゆるくのぼってその  
消えるあたりには厚くかつた残りの雪のまだ解けずに人  
ヶ痕をかくしてゐる。

浅野は宝内坊と牙山が現れはじめて。牙山の頂から地平  
線と傾けたやうに下まゝ、カーブの裾野の輪廓がその  
輪廓の中の美しい、枯草色と遠く海をも望むやうな  
晴れやかな空との間に絶妙な一線を大きくかけおる。  
煙は山を離れおに風になびいてその方へ、その色は淡く  
紅に染みかけてゐる。

見かたんたん赤を増して高原はこれに伴ふて美しくなる。  
高原は秋か冬の匂だ。その常に一種淋しい気味の色、その  
空の色、うづ見ても秋か冬を想ふ。そしてその秋か冬か



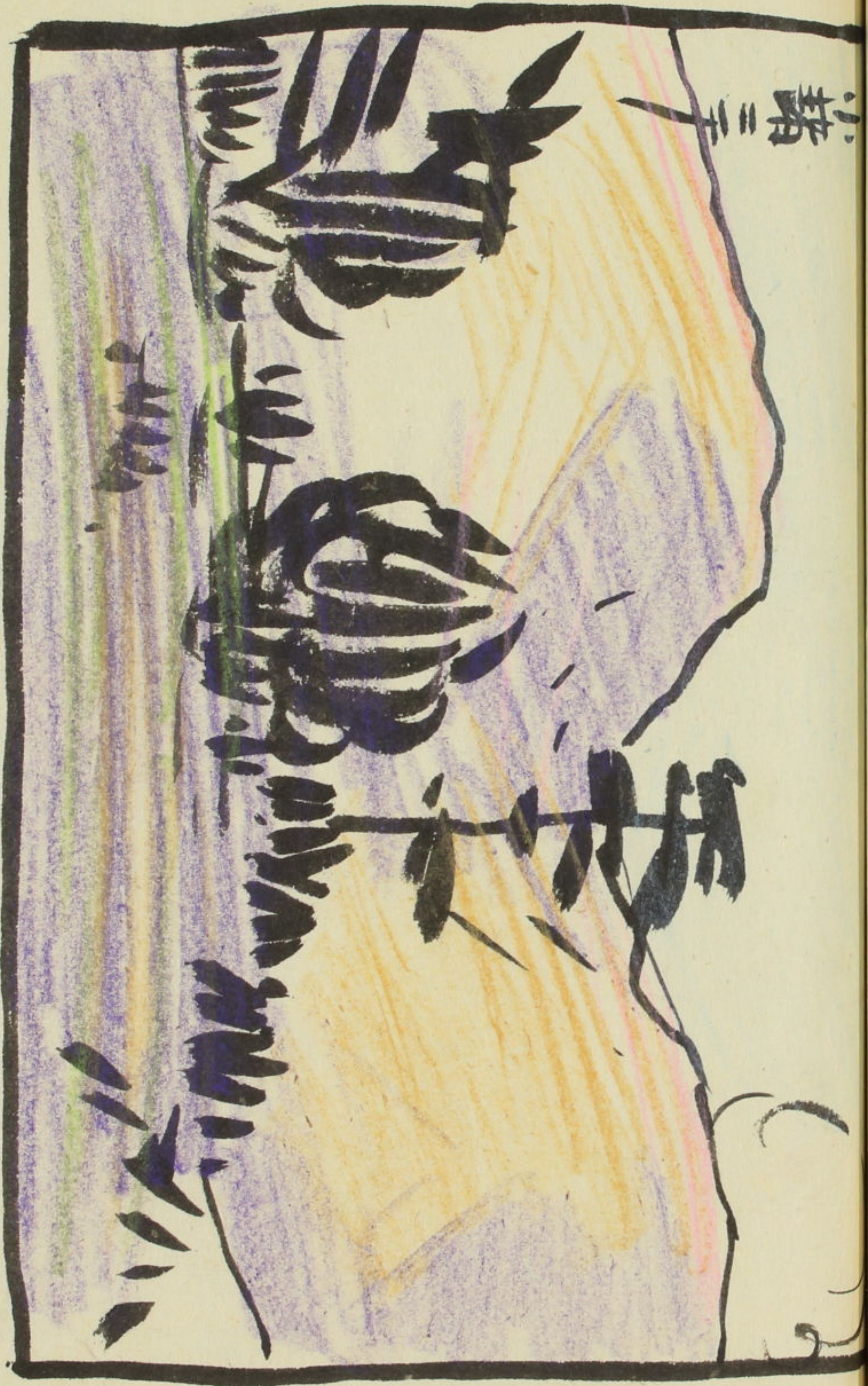
本郷はさる高原は秋かつみにかけて最も淋しい、最も  
 荒れこぬる、高原の味を感ずるのは今だ。その秋の多。  
 高原の今花やか色してゐる中、その陰影に伴ふ淋しい色  
 の方はひしひしと胸にせまる。  
 同じ高原でも犀川の高原はとこの千曲川の高原とは大に  
 異ふ。彼の背景には日本アルプスがある。この背景にはハ  
 萩と浅雪がある。ハ萩や浅雪はさる高原に向つて美  
 し、裾野を引いてゐる。その大様なり、輪廓は高原と  
 山の頂との間に一種微妙な曲線美を示してゐる。そしてそ  
 の色は淋しい。けれどもその面には温い色が現れてゐる。日本  
 アルプスはさる高原に向つては冷しい湖のやうな谷を開き、真  
 白にたぎる激流を流して、その高原から直に、と壯麗な

る死の大層とも譬へた、やうな夫々と天と突く連歌は時  
ちりとの色は流布に冷い。青は冷、青より紫は氷晶  
より冷やかに白となつては皆も裂けるばかりに冷い、而して  
その輪廓は尖つてゐる。

厚川の高原は神話の領で千曲川の高原は小説の領だ。  
千曲川に沿ふとは島崎藤村氏の詩集と破戒あり、  
厚川に沿ふとはウエストン氏の「日本アルプス」と鳥水氏の幾  
多の自然を讚美したる名文がある。鳥

厚川の水は冷く清み、千曲の水は温く清み、二の川と  
の畔の自然とは千曲の賑と距つて、対照がある。

この千曲の高原を走つてゆく汽車は田中にくる。  
浅るは牙山と宝内坊の間に前掛山をへ見えるやうになつた。



前楹の上には雲と紡ふもの煙が静に動いてゐる。打ち見は  
は平ねた山だ。

高原の汽車は常に上りを行つてゆく。向ふ人南佐久の方  
か目に入るやうになつて浅下の裾の垂れたあたりには美しく  
可愛んだ碓氷丸船つっきの山が見える。そして愈々北佐久  
の高原に入った。

夕日の影が透過して冷くなった頃小渚についた。

車室を走ると高原の秋の冷やかさが身に沁みる。夕日を  
受けた高原の林、所の屋根の上に浅くの牙山が赤々と  
照り出して秋の空に浮いて見える。

秋の暮れゆく淋しい所を通過していつか懐古園にまたゝは  
古城の跡がある。石垣のまわりに松は数だけある。冷たい秋の

と云かこには一際深い。  
その一角を這つて脚の下に夕日影のまはや消えたる原の淋し  
い色や牛曲の白く光る流を見てもると目はやかて待てるの  
頂に引かぬ。先程までその半暖以上を血のやうに染  
めこそその牙<sup>山</sup>の上に流る、煙を金色の狼煙のやうに輝  
かせたり白はたんとんに薄れて山の陰より湧き出つる  
根柢色の濃い影が次第に夕陽の領を蝕みゆくと夕  
日は谷より岨に流れ、峯の一角に縮り細り細りて  
遂に蒼然と暮れ了る。その水を見つめてみると淋し  
い秋の夕暮が遠に自分の上にも来たやうな気がして冷い  
高原の秋の気が薄の陰から見<sup>見</sup>に沁みこくる。  
斬りして、またまた小諸のふれ屋といふのに泊つた。

この宿も街道筋によく見る淋に構(の)家巨。  
夜月が高原の透明な大気にと夕澄んでゐる。寂しにま  
るこの榎まぬかとはかり静かな小語の所を冷やかに身に  
必本夜気に外套の襟をこながらうとゆめりある。この城  
趾に荒城の月を眺めた。

今荒城の夜半の月  
まらぬ光誰か為を  
垣に残るはたし桂  
松に歌ふはたし嵐

天上影はまらぬと

榮花はうつる世の姿  
うつさんとてか今もなほ  
あ、荒城の夜半の月

松の梢を満る月に立つて歌ふと死んだやうに静かな城  
趾はよの歌を終るを待って猶静けさを増した。  
浅写を見ると月に淡く照らしてその頂の煙は動くとも見え  
おたほんわり白。懐、山、  
高原の月は冷さか殊に身に沁む。十月一日小落くめや  
五、浅写嶽

不三の女神と神集ひ  
火雨ふりして醜玉と



い百日に百夜と浄めけん  
若き波の浅る山、

依久の廣野に眠りたる

千田乙女の面影は

猛き火を夢みつ、

今も清らかな流れたり

(伊良子清白)

浅川の秋の頂を窮めるるある。

暁に起きて出てたとき、空は美しく晴れて僅に白く東には

眞黒な淋しい所の低い屋根の上に明星が輝いてゐる。

三つ星も輝いてゐる、北斗七星も、小熊星座も、皆美しく輝いて

月もはや沈んでしまつた。

ひやりとした晩秋の冷気が殊に身に沁む。やがて浅川の

山には日の出前の冷い光が明るく見えはじめ、頃宿を出

た、所々離れる頃には大分明るくなつて板屋根の上

には冷い霜が見えて朝の空の冷い反射を受けて淋

しい所の道は冷く照らされてゐた。

此の街道に別れて北に折れると寒い、色した小流の畔から

直に梯子田つきの野へ出て来た日の照さぬ晴れやかな

高原の空に出る。

細い野道は藪々などの哀に偃してその上に早くも雪は

高原の霜の痛くしとも白い。田の用水に架けた小さな板

橋には未だ足跡もついでない。そこに草鞋の跡も軽く

踏まれてゆく。

梯子田の間を登るに随つて北依久の高原は美しい、朝になつてゆゆく。まだ日は遠方高原の上に昇らぬ。けんどゆつたり引かれた裾野の輪廓は明るく、眩いやうな光の空の縁を這つてゐる。

今にもその上に眩い日が浮びてきた。

その中に田の一段一段に高くたつて小渚の町は足の下にその彼方には千曲川の白流が見えるやうになつた。その畔についた厩も見える。南依久の高原には霧の海が湖のやうに湛えて朝風に動くその端はハッテ嶽の大屏風のやうな連峯の美しく引たその裾に波を打つてゐる。甲斐境までやがて見晴らせる。ハッテ嶽の赤嶽から硫黄嶽あたりはその上に軽く流れた雲に折々及まかしてその雲は

蒼蒼色にその峯は美しい景だ。

西の方には雲が多く動かない空に浮んで保福寺つゞきの峯その彼方には僅けさ日本アルプスの雲や雪やその雪たき所は澄んだ碧に流石日本のアルプスの美しい連嶽の峯は雲に折々その雲の上に浮む尖峰にその特有の壯美を見せてゐる。

まだ日は登らぬ、梯子田の間から一村に入ったとき漸やく浅い煙は輝きはじめ、峯には赤い日の色が見えはじめた。その村は浅い裾の高原に聳立する寂しい村のつらあつた。巨木の枝もたわにまつてと澄したるも多し。その雪と高原の早、霜を踏み吐く息自ら吹き下からやうやうに浅い山へと近くなつてゆく。

村はつれには明るく、林がふいてその下にはふっさり美しい、野菊  
兜菊、いっれ高木の晩秋に美しい、色も鮮やかな、ものけは、  
若葉の煙より、林れた巨煙より、その中より、中にかかて  
淋しい村も、なつても、けや、人種まぬ、落葉松多き、浅  
るの山麓に入った。

落葉松の森林に入る前に一と休みする。日の美しい、  
影は次第に山の上から下にも、擴がって来た。けいれまた  
こまひは照らさぬ。浅るの連山は、も見える。

ハヤ萩が見える、その西から北へ、と近づいた、山脈も所々に  
目ま受けこめる。南佐久の一部には、お務の海がまた、揺  
きも、あに、湛えてゐる。甲斐の金峯山から、甲武信萩に  
つづく山塊は、透き通った、紫色に、南の明るく、空を劃つ

てゐる。金ヶ萩、茅ヶ萩と見える。この林の端に清い水  
が、草のむから流れてゐる。こから山の上の湯の平の、屋まひは  
飲料の水は、な、と、ふ、こ、こ、で、飲んだ、冷かった。秋の水  
のこも、は、早凍、ん、は、かり。その、も、その、ま、こ、こ、には、霜、柱  
と、見えて、細い、霧の、聲、と、心、つけ、ば、聞、え、な、い、は、な、い、か。  
こ、から、落葉松の林に入る。

秋の山登りの、裾野、路、で、落葉松の林を、過、る、程、嬉、しい、  
こと、も、あ、る、ま、い。

林に入ると、真すい、な、幹、が、さ、び、と、延、び、て、その、葉、は、ん、な、細、葉、  
け、明、く、し、て、な、ん、た、か、氣、の、澄、む、下、仙、臺、の、や、な、林、の、美、し  
い、空、が、も、明、く、い、葉、の、隙、から、窺、えて、その、林、の、下、草、は、と  
見、れ、は、早、く、より、草、枯、る、高、原、に、あ、ら、し、秋、の、名、残、に、静

臍の花が夕に見る孤波の峯の紫よりも清い色して所に  
笑んで野菊や山菊の乳白の花辨も秋の色深い。そして  
落葉松の幹と葉は美はし、黄に染んでこ  
れも秋だ。百も澄ますと静かな山林の気が迫つて年々  
つた道と歩むは草鞋の音のこれも静である。  
山の上の方から下つて来た日の影の早この辺にも及んで真  
黄に染まった白樺の相はまづ輝いた、この真白な幹も  
落葉松の黄はんだ葉も、日を得て輝かぬものはな、  
けいと透明な空気の光ちをぬる高原は花やかに輝か  
日の光の透らぬ所は深い冷い色をしてぬる、そして美し  
く日本受けた白樺の黄葉も、日を受けぬと落葉松の下  
枝も等しく、秋の澄んだ高い空に浮いてぬた。

自分等はどの道を登つてゆく、白樺が道の畔にも並んでぬる、  
は、唯いふであるかうも、幹は真白に塗つたやう、その葉は  
軟かげに舞れて皆黄ばんでぬる、林の下の湿つた道を歩  
みつ、白樺の木かげも道も、林の隙から下る黄金色  
の朝日の光と共に込みこむやうに冷い山の気を感じると実に  
高原の晩秋の美を満せぬにはぬらぬらした。  
塩野の官林かつすつとついた落葉松の林はなりに長  
かった、所に林の場且や他の標木もかたつた。  
この中に白樺はと道す多くなる、この白樺を見たいと山  
らしといふやうな気は一向起らぬ。その真白に輝く幹  
と見ると本當に山中の美しさを感じある、この落葉松と  
樺と共に昔は人で冷い林まつつてぬるから浅く頂



きの邊に言ひの本見るとこに浅るの業方が感ぜられた、  
 田中あたりの汽車の中、長しきは小諸の城趾から眺めた  
 浅るは如何見ても高原の背見だ。こゝに立つて本の間から  
 仰ると浅るは如何にも巨大なるものとなつてこの林や野  
 は其のその前景としかならぬ。  
 静かな林かう出るとやがて蛇堀川の谷の岨にさる、枯草等は  
 日さぬつて温い色まじりぬる。白樺がもろにありて今ま  
 絶えて見えなかつたハハ森がその邊かな雲に一と陰雄たな  
 汝に南佐久の事と領してたそく従へておた。千曲川の流  
 も見える、ハハ森の下南佐久の方面には重務の海の前より  
 は少そくたりつても尚日を受けて真日に輝きつ、湛えてゐた。  
 行半には沖の外輪山を突破して流る、蛇堀川の火は激

が一面に紅葉したりの谷をこなた（と閑）てゐる。見ゆれば  
碧に澄んだ空にしつきりと連翹色の霞を共うせたのは  
宝岡坊、それと蛇屈川の火に漸く距て、對こゝろは  
牙山、その鋭さ収めた尖鋭さ共から下つては紅葉遊  
あかりの谷に隈にたつた日の此所に流んでゐる。  
こゝでハヤカを撮影する。白樺を前景にして午前の  
薄のゆゑに松野をハヤカして佐久の雲、ハヤカの雲、皆たこの  
こゝからは暫し平なるこの川の流をゆくのである。推し松や楢  
なるもの植ゑられた下の岨の道を行きつゝ、下の流を見ると  
いふれに何か硫黄でも念んでゐるのであらう。あやしく苔に  
石や川岸に沈澱して水も清んではおゐる。  
こゝから不動の滝のたゞまの道は概めて緩ゆるの殆ど平な



所を行くを、あつても道の畔には梅鉢草の白花や松露  
 草や、龍膽、尾花など秋の花のもや枯れんとして藍色  
 け濃く染められたる。かかて道の側にも美しく紅葉した  
 本が見えはじめた。山葡萄や榛、なほは赭く乾いてその  
 響を待くと明瞭な聲して鶉が鳴く。  
 谷の向ふ側を見たと白樺の黄葉が他の木の赤く紅葉し  
 た中に殊更著しく見えて谷一隅で、その白、極く一識別す  
 ることが出来る。  
 道は谷の右岸から左岸に移った。川の水はや、硫黄臭かつ  
 た。道はここからは谷の底をゆく、白楊樹はその白葉け  
 た枝を道の傍にさし出し、ふき鷹香草の小さな葉は石の  
 上に枯りにたつて残り、赤はうしの枯葉は巻いてしまつて、蛇の

脱腋のやうになつてゐる。

山の林の秋はげに美しい。仰ぐ所の岨は火山灰の厚層  
が露出して白樺の黄葉が浪手やかに名は知らぬ雑木の  
紅は霜に合つかさなる程濃い。尤に蘆薈岩を仰ぐ  
炭岩の冷えて怪しく凝つたものであらう。

室内は木の管面に秋の目を浴びて空にすつくりと響え  
てその峠の枯れた木も立岩も皆見える。その傾斜の一は  
こなたに裾野に放射する一線となり一つは湯の平となる。  
湯の平の白樺の深林はこゝからとも既に見える。

木の下の用いた所は上を仰ぎ山を望み木々の影をたす  
ては紅葉も美しい。雑木の静けさや味ひつ、谷の川水に流  
ぶて水は空に上つてゆく。白樺の下陰、白楊樹の側、榛



水榭、山毛櫨、椽、大桝など山旅に見馴れた木々の葉、葉は赤らみ、黄、赤み、落ち散るものもある。梢に残るものもある。さういふものを鳥の鳴く音に耳傾けつゝ、行くのも楽しい。道の中に再び蛇堀りや渡つて又右岸に移る。この辺の谷の上には小屋があった。淡い煙が五月とよつてゐる。牙山は今では当面に鋭戟を植ゑたやうな丸峯の隈、さ紅葉に包んで得えこゝろ。楠の綿のやうな雲が遙かの空に浮んで、空の色はとろとろ深山に見る深藍色となつた。

秋の山道は実に愉快だ。積らんだ軽い、は葉はさややうな音を立てて風のまにまに林の音をたてる。空は美しく澄む。谷川の水は微妙な音波を傳へる。すべての物が軽い。

澄んだ調子になつてその間をゆく人の心も自ら軽やかに、かくてさういふさややく、さよも軽い。

その中に遠くその並ぶるを望んでゐた宝田坊と牙山とは次第に近くなつて山毛櫨や水榭の木立をせばれた。坊はもはや牙山は右にその尖峰を見せた。宝田坊の屋根が多斜面をなしてゐる。

既に落葉、潤葉樹の帯は出はづれてしまつた。こんどは針葉樹の帯となる。

下谷の植物帯の变化するところの上あたりの草生に二の鳥居がある。小諸からここまで約二里である。この辺からは深山らしく偃つた落葉松がまをる所は、この黄ばんで金色に光る葉を伝へて、寒そうなた幹はあ

らにはある。

急な坂一つで草のぼろを登るともはや、けしきよく落葉松と白樺の外には何もな、位になって一面の美しい原は秋の末の如くに黄ばんで見下す谷は紅葉してゐる。牙の陰にも紅葉が見える。

この時かう雪が吐はじめた。前掛の上から宝内坊の裏にかけて白い雪が吐いてゐる。頂に行つて霧に巻かなくてはな

はなが、坂を登つてからは湯の平まで平坦に近い、火口漱の中の道はゆるいのである。丸の宝内坊につつと峯は、はなはなとゆるゆるな岩壁をこなたにに向けて截り立て、その乱れた岩は、つらも似の透き通つた光に輝いてゐる。

三の鳥居、三合目はこの美しい、山上の平地の上にある。

見るとと前掛にかつた雪の外には天に雲がな、その空の色、うまでかゝる美しい空の色を見たことはな。今まで幾度か高山の頂に立つた。けれど未だ高山の秋の空の何れなるものは知らなかつた。夏の美しい、空は嘗て日光白根の八千五百尺の頂に於て眺めた、そのときは

水浅黄のやうな深青だつた。今自分も頭上には藍のやうにかぶさつてゐるのには冷、水の深く湛えたやうな深藍色に折々風光がするが、まるで氷の片々、浮き、そのは

しな、かと思ふは、冷く見えて一種清涼な感を抱かせる。実に青い空だ。この青は平地にある見られる青とはな、高山の上のな、くは見えぬ色だ。山に



登ってこの空を仰ぐぬもりの色盲だ。歪七目目だ。  
 天もしかり深い神秘の色を帯びてゐる。地はその冷たい陰  
 影に盡くすその天の深い色が映るやうに感ぜられる。  
 たかうすべりの色が冷たい。若くしの葉も、  
 白樺も、枯草も、石も。  
 ゆるぎをゆるぐうちに湯の平の針葉樹の深林が見えて  
 くる。雪に小屋が見える。四合五勺の小屋だ。  
 その小屋が見えてから暫くはこの谷の底の高原をゆるぐにあ  
 る。前樹の数はあまやかに見えて、その上には暗煙と  
 雲とがくちからかたてゐる。  
 折れ風が吹く寒い風だ。枯草の上を渡ると白く光  
 る。この山の上にあつては何を見ても皆寒の色してゐる。

この高原から湯の平につづく所はすべて寒色した針葉  
樹の林だ。しばしゆくとその林は近くなる。蛇壺川の源  
の硫黄孔を見つ、落葉松の<sup>アルシツ</sup>偃るるをゆくと  
岩鏡、こけきも、たりの<sup>アルシツ</sup>高山植物がほつほつ見えて  
その中に湯の平の小舎にくる。牙はこの辺から尖る。  
この辺には白檜が美し、林を歩いて歸るる。小屋は  
今年の六月から開かれたもので本造りの可成完備したものだ。  
人がぬて種々賣つてゐる。こでスタンプも押す。一泊を  
きと書きた張り張も新し。  
この小屋番になつても、寒くはあつても白檜の木  
の間に焚火を友にして苔靴や岩高園を採つて冷水  
を飲んでゐるのも悪くはない。

こゝ書夜下した。茶も吞めぬ。張り紙を見ると菓子も  
とも煮るやうである。スケッチにスタンプを押して貰つて  
しほし休んで出た。この小屋にいたのは十時頃であ  
つた。つゝかう天狗の路次が怖しい岩が見える。

小屋の及かう登ると、つゝも殆ど平な浅るの氷火原、湯の  
平とゆふである。白檜の木は前掛の裾には殊々多し。こ  
の黒い怪形した林を見ると高山の荘嚴が感ぜられる。麓の  
高原からこの一帯の山が雪を被つて真白になつても、こゝには  
常に緑なるこの白檜がその深緑色に獨りその勁きを誇つて  
純白に変わった雷鳥の淋しく鳴く所となるのであらう。  
林の中には白樺も稀に見える。ぶさぶさつー白樺の同類で  
ある。――柵など深山の奥の木が真黒に厚く茂つてゐる。

落葉松もある。高山植物は歩むに多くなつてゆく。紅葉  
のやうな紅葉のついた苔桃や、碧玉のやうな山石高蘭の  
つれも山上の霜に感る物は醜醜するまじに熟して甘い。浅  
く葡萄とつてゐるくらまめの木や、これも甘い実を多く  
とくと焼石の草鞋を踏む荒土に乱生してゐる。そうた。  
この苔桃や山石高蘭などの花が咲いてゐたときだ。日光の白  
根、尾瀬、上州の奥、會津、越後の高山を涉つてこれ等の  
花を見、未だ熟さぬ実の液を吮ひ十日ばかりの山行の至る所  
にオシスとしたのはこれだ。同じ年の中に再びこれ等の甘い液  
を吮ふのかと思ふと自分に取つてこの山の幸の多いのを感謝せず  
にはゐられぬ。  
深山の外をめぐつて今また此に白つてゐたのをや、東に轉

あると光景はややその趣を変へる。宝田坊一帯の氷の外  
輪山はその雑草多し、山腹までなたに見せて、熔岩の層  
は歴々として目に入る。その頂には白檜や落葉松な  
どが山上の稀薄になりかけた空気を透して数へることも  
出た。

前掛山はその丸い頂と白檜の林の上に出してゐる。所には  
たかまの紅葉が見える。白檜はもうこの辺では見ることが  
出来なかつた。

この荒れた湯の平は日本唯一の、ミヤマオウソクテウの産地で  
あるが、もう季節が過ぎた為めにこの高原蝶を見ること  
が出来なかつたのは遺憾であった。

二合目あたりから眺めたときに見た雪はこの時既に眼色に

顔の上に満ちてゐる。けれど霧にはなつてゐなかつた。

火山の上のかる種梨の荒原ほど淋しい、荒れたものはあるま  
い。今年の夏日光の奥白根と前白根との雪打る出づの雪の  
火に原の谷まで道通してまると生物の世、寂寥を感ずる。僕  
はもとよとよと種梨の寂寥を感ずるを得なかつた。  
極ゆる緩傾斜であった火に原中の谷は五合目あたりから  
そろそろ傾斜が急になつたけれどまだ普通の坂路と同じ位  
の緩急だ。五合目の少し過ぎたあたりは目取も植物も豊言用  
である。白玉の木も現れた。その目やうに可憐な白玉は高  
山の状にはふさはしい色だ。

登山の少し離れた所に偃松らし、しのが見えた。行って見ると  
果して偃松である。白ちやけた緑の五葉に厚く茂つたのが

五六里にも偃つて高さは四五丈にすぎない。これでは山の脚は充分である。白樺がまじると山らしくない。偃松がたいてい、更に偃んで高山らしくない。ハチ尺の荒原にはもうこれ等のものの生活は許してある。

その外所には偃松の蔓近してゐるのを見たけれど新火山の噴出物の堆積とゐる。故か他の高山に見るやうな満目の山側が盡く偃松で覆はれてゐるといふやうな景色はない。山を留蘭の紫の花を摘みつゝ、上つてゆく。六合目あたりからはもう植物が少ななつて浅る葡萄の俵かに紅い葉を石炭層のやうな石の下に見せこめる丈となつた。

この辺に來ると雪岡坊つその外輪山は絶えてその下には浅る雪の裾の六里ヶ原が草原陸から吾妻川の上流まで擴つて一面の荒原が盡く草枯れて所々に落葉松のまがみ見える。跡の上にも雪がかつてゐる。その雪の下から窺つてすてきを見こめるのである。毛信の玉子の連山は未だ見えな、が六里ヶ原を距つた元白根山あたりはやはり雪がかつてゐる。六里ヶ原には二つの山に、つた雪の間の晴れたら、秋の日が照してゐる。一度、浅るから流下した押し出しの熔岩流の鼠色に黒いその跡が見えた。

七合にゐるあたりから風は殊に激しくなつて、強く凍つた雪——高山や寒きまに多、フイルンアイスだ——が横敷いた、まつけるやうに吹こくる。耳の傍で勁、風はヒューヒュー鳴つて、道をゆく。その吹こつけてくるフイルンアイスの音を細い、山を登るの道と



賽河原

山を登りて一草生ずる山脈を横にゆく中に七合に上る。雪  
 は固より一時的なものである。此の所には止みかけた。見下  
 すと百里と原の裾野に虹が出た。灰色した雲と枯草に日  
 の照す裾野との間に七の色美しくかつた虹。陽し、ことには  
 圓とならなかつたけれどその美しい色彩は決して市街  
 の両方のそれと同じとは想はれなかつた。  
 遙か下の五里川の畔には村が小さく見える。その向ふは  
 また白根山の裾に連つて總てが枯草色してゐる。五里の高原  
 原も美しい。  
 宝内坊のつゞきは次第に遠くなる。今は前林山の一踏を通つ  
 てゐるのである。草は僅に牛の毛草といふのはかりである。それ  
 も彼所上一草。此所に一草。極めあつて、散々してゐるので



ある。八合と出るとやがて前掛の砦まで来て賽の河原に  
出る。小さい祠もある。少く想む。

ここへくると御釜はすぐその前に石はかりの丘より真白  
に煙を噴いてその煙はここまでも通ふ。真白はその煙は強  
南西の風に駆られて火に煙の最も低い東北隅からいん  
上州に流れてゆく。

賽の河原からついで前掛と御釜の間にある。独り石は  
火に原である。前掛は木の外輪山であつて御釜は最  
新の火口丘である。

御釜のある丘の中腹から前掛山さうつす。前掛の岩層  
の切ろしいばかりで流れてそのことなため左や賽の河原の噴口  
もたつてゐる。西を望むと三つ尾根山、烏帽子嶽など

鼠色の雲の下から見える。この一帯の連山の向ふに遠く青色して  
みえるのは日本アルプスであらう。けれどもその尖をたると危峰は見  
られぬ。鳥帽子嶽の北方枯草色した原の中に路が一條  
見える。上田と吾妻との間の嶺の道である。 草津あた  
りの山はまた雲が晴れぬ。  
この山の上もまた雲が晴れぬ。前嶽の上の雲は灰色に行つ  
ては来、来とは行く。池がたない。  
御釜から立ち昇る大噴煙の真白なのを望み、満目  
皆石塊とふらふらゆくと、つか火口壁の上になる。途中に  
一つ割目がある。その中からは薄い水蒸気が昇って石には  
硫黄、輝のついたものもある。  
噴火口の壁に立つとたゞ真白に灰色にうつまく噴気を見

るばかり噴煙の盛むたをみた噴火孔の様子を見ることがも  
出来ぬ。 たゞ真白だ、灰色だ。そして風の向によつては亞  
硫酸瓦斯を食った噴気が霞をくくる。その夕に噴煙を  
するやうに著しい。このために遂に噴煙を撮影することは  
出来なかつた。

前に来たときには眺望は所謂雲海となつて思ふやうにはな  
かつたが噴火孔は実に静穏であった。霧をたると大坎からは  
たゞ淡蒼色した瓦斯が風無き空に直上してその布しい  
深い坑は底まで見えぬ。底は熔岩や砂力だ。一面  
に硫黄が何れも貴く見えた。その所々に底知れぬ坑が用  
いこめてそこから瓦斯が昇つてゐた。その沸るし、火に  
の壁や赭色した熔岩などは初て山に登った自分と驚愕

した。そしてこのとき、噴火を一回して雲海が浮ぶ日  
本の大山系が盡くを眺めて下山した。

今は噴火孔はそこから勢をめて立ち昇って天を衝く噴  
烟のため、この壁すらも見えない。山岳が煙の中に飛  
んでゐる。

壁に近づいて無間谷の方へとゆく。前掛山の石杖岩壁  
は赭色に元けて一草をへつけすにその頂の三角點はてからも  
小さく見える。

追分道に近づいて噴火は壁がうしろに下がった所へ休む。  
この時前掛の上の雲も北に去って、佐久の唐野は、この山、この  
川、この丘、この野と共に一望の下に展開されてゐた。

信濃の大高原の舟の涯を限る関東山脈の峰々の肩が

ら揺り落されたやうな平蕪は、関東の大平原であつた。

見渡せば一片の雲たに目先をを控めて飛ぶものはない。ハ  
ヶ岳の上には屯したが、金峯の上にも浮いてゐたが、毫もこの  
廣に眺めを妨げなかつた。

4曲の川は銀の糸すじの如くに光って、總てが枯草色した佐久  
の高原の空に流れてゐる。ハヶ岳の偉大ななる山容は大空  
の半ばを劃して白く光る。秋の雲は、この中腹に流れてゐる。

金峯、玉師、この空の鈍、頂は奥、巽、この連脈が、銀  
歯杖に浪を搏つて、甲武信、嶺から北に折れて、高原と平原の  
境をなして、この波動脈は、遠く、甲斐境から、直ちに、浅る

の麓に倚る、荒船山の南まで及んでゐる。荒船から碓氷に  
つづく、一帯の山脈は、最も適切に、高原と平原の境を示してゐ

る。依久の高原の最も高、部分が極めて平に據かるところ  
果が微茫として俗となる。而してその低なる所の一線  
かう西、信濃の高原はすべて枯草色である。寂しい色だ。  
東、国本平野は緑色がまた美しく輝いて田の面の色であ  
らう。黄金色である。

ハ、嶽の右肩には甲斐アルプスの一峰、駒ヶ嶽かゝる尖頂  
を淡く見せて茅ヶ嶽、金ヶ嶽も同じく淡く。不二は見えな  
い。ハ、嶽の左は犀川の高原に積層雲が動かず湛えて  
目下アルプスを隠してある。

浅くその頂から眺めた依久の高原程美しいものもあるま  
秋の日かげは美しく空気に光を渡して立料の麓、流  
鏡馬原あたりには炭焼の煙がゆるく白く立ち昇って風

無き高原の空に真っ直ぐ立ち昇る。

美しくまはす曲川の水、一更に北もしろまは頂より眺めた裾野  
のさきである。碓氷嶺のあたりから今朝立ち上った小諸まで  
一線の枯草色した高原の中に見ゆるものは信越緑の鉄道  
である。小苗掛かゝ鉄道に分れて灰色した一筋の林に  
横はつてゐるのは中仙道の古道である。小苗掛、古宿、  
宿市、追分の四古驛は一望枯草色した荒原の中に  
脱けた遠きもの如く野々として方形したと落葉松の疎林  
の彼方に見える。

右にこの大高原の眺を縦にし、たに、<sup>高</sup>まきく噴煙の天上の  
風に、<sup>高</sup>まきく大洪水の如くに上州の空に流る、<sup>高</sup>望み、<sup>高</sup>棚  
柱とした旧火口の壁の跡に沿ふてゆく。



しばしこれと轉ぶにしたかつて上州の平原より漸くその高原も視界の中にあは。碓氷川・谷が妙義の麓をゆるる彼方には書を洩れた日に輝く平原に高崎節が見える。少し距れて前橋、いづれも平原の色を逢かである。遠く精霊の霞む川には岩波の双尖が淡く見える。

角落火山の連脈を距て、榛名、赤城は一直線の上にもこの類似した形を比べあひながら立つてゐる。榛名は榛名富士の中尖火口丘から、伊香保平の火口原。二つ岳、掃部岳等の山々まで夏眺めた跡にひきかへていづれも草枯れた色のや、遠く見えて、そのゆるく、八雲に引いた裾は一つは烏川の谷、一つは吾妻川の谷に下つてゐるものも見える。赤城と榛名と利根の河谷を距て、榛名よりは一ときは高。その

放射状を帯びた山側に目がこると群峰紅蓮してスカイライン  
を突破するのが目に大なる、その最北に不<sub>二</sub>形した<sub>一</sub>のは黒檜山の  
七千尺の頂、ついで駒ヶ嶽、地蔵、荒山、地藏嶽と、気山の  
頂に見えるのは小沼火口、鋸割山や鈴ヶ峯は、輪廊の内  
に<sub>二</sub>なつてしまつて見えな<sub>一</sub>い。  
も、美しい、群峰のてまを見るときかの頂の湖畔の水櫃の  
林、山毛櫨、白樺の深林、いづれも今は紅葉して美しくら  
う。その景色を想ふところ、かつゆく雲に登りてかの湖の中の島  
へ下り立ちたい。もし日子の餘裕があれば必ずこれに登攀  
を企てたいあらう。  
は島の草原には雪が流れて日光の山は見えない。武尊山  
の五つの峯はその三つが見えた。

ホカカ  
武尊山

吾妻の畔に立つ子持、小婦子の諸山も草枯れてゐる。吾妻川の高原を繞る諸山は皆雲がかうてゐる。

その中に無間谷の上には、無間谷はこの山の上の輻射輝するに一つ異つた貌に東南の方向に放射して岩物薄く透れて淡い蒸気が噴いてゐる。

その上を回リ遂に旧火の壁が低く本側に残つて浅く狭い火に原を穿つてゐる中に本火の底は細か、火山灰でゐるを核切つて旧火の壁の上まで来ると眺めは更に浅く、本麓の裾野を加へて更に廣くなる。

見下すと地から生え出たやうに、美山石はかりの山が崛起して天に向ふが、この今ゐる浅く、本麓の裾野のすくぬ根にあつて小規模の火山のあるのは奇

生火山の浅くである。その馬蹄形した小火には、くから明かに見える。六里と原の大荒原は、その北から吾妻の高原に接して枯草の途つた上に、荒れた落葉松の林が疎に見えて白樺も小さく見える。天明の大噴火に噴いた泥流、溶岩流はその鉄灰色に目を吸つて荒原の上に移はつてゐる。

火山灰を踏んで山の上に立つてゐると一段高、火にかうは風の具合で吹き下す硫煙に硫黄の強き香がふんと響く。

それから、焦石の間は火山灰を踏みつけた道の白く、其のいさ出つて上りにはまして急な斜面を軽井沢として下つてゆくのである。

すくぬ山の上りは息がふれて足は進む下りは足が痛く

て息はそれなり。殊に急の傾斜となると膝が痛んで最  
も苦痛だ。これよりは上りの方が楽だ。

と小川も下りは速きが早くて暫く間に靴はした旧火に壁は  
見よるばかりに高くたつてゆく。その上に山峯から昇る噴  
煙が真白にその目も吸って陰になつては鼠色に濃く天を指  
して上つてゆく。それを仰ぎつ、漸々に下つてゆく。

曾つてこの山を攀ぢた時、矢張り下りにはこの道であつた。  
として雲海の波が小浅る山をその底深く沈めて白く、  
の穂波が五合目位の所にいた。甚えたやうになつて風の  
まに動く。その潮の時に裂けて青々と若葉草の葉の六  
里と原を現して玉境の茶屋の草屋根を見せたととき、方  
向を定めるに其を人の身のや何に嬉しかったらう。今は杖

の大空の澄みに澄んで小浅る大浅るの村麓から落葉松の林  
が角落山、浅る隠、鼻曲山などの屈曲甚し、波状を  
躍させたあたりまで草枯れた草原。ついで林の境の一段  
がその上に真直に土色して見える。その果が小浅るの村麓に  
終る所、かの茶屋の茅屋根はかすかに見えた。行きの軽井  
沢の方向を望むと頂も見えだが離れつつ碓氷にづく小丘陵の  
彼方にまたたき低く下るにつれて隠れかけてゐた。頂におこり  
荒船の上に流れこめた雲の連帯はこの時には鼻曲山の上まで及んで  
ゐた。

荒涼たる山側を下るにつれて植物は現はれ始めた。例の少分の  
鉄分には堪ふる牛の毛草、峯すわうなどが先に見えた。  
この浅るの東側は天明の噴火の害の甚しかった為めに植物



は極めて少い。また同じ植物のある高度も左側の方に於て少い。

下るにつれて植生の荒原は近くなる五に妻の高原の上には寒の河原以来見えなかつた元白根山がまた雲と雲の中腹にかけ見えはじめた。

中腹で亦この晝食をして其所から頂と元白根を撮影した。

樺名は此の時既に近い連山に隠れ赤城はよその七合目以上さのもかきこめた。足尾の山には雪がある。

亦この中飯をすませたからは又焼石の山側を駆け下る。始めて牛の毛草があつてから逢ふ下になつて始めて先着る藪や、苔藓、しろまめの木芽が現れた。落葉松の穂のかが

なつてこの下にある。

元白根の隈に草津が現れた。と云ふ事もたゞ一の谷に霧がふつかり溜つてゐるのが見えたに過ぎぬ。今日は山上から他の山を望むには適當せぬ日だ。下から山を望むにはよ、目であらうけれど。

もう諸種の植物が現れこからは小浅沼は近い六里と名の燃若流を眺め或は植物の實を摘み或は低く偃した妙義の峰を望みつ、下つてゆくと落葉松の林に入る。もう小浅沼は眼前にその岩石の露れた赤裸の姿を窺ひやかしてゐるのが近い。

落葉松の林を出て峻坂を一つ下ると直に小浅沼の麓になる。二合目に達する前であつたまゝ見なかつた赤松などがこの時

かう再び出て来た。白樺もある。くろまめの木の實を摘み、  
こゝに暫し憩む。こゝからはこゝの借の好む裾野の道である。  
稚い矮い赤松の間に馬が一つ敷かれてゐる。これは登山者の乗  
つて来たものらしい。こゝは軽井沢方面で馬返しといふ。  
小寺の脚を繞りつゝ、その頂を望むと高き嶺、雨降れば  
山骨は云に地敷の墓らしく荒れた色して青い空に響いて  
ゐる。

白樺の林の中に入る。早稲の道は落し書したりの寒い木立  
を抜けるとやがて淋しい草津街の西の只居屋の北に出る。  
小浅の脚に下つたときは三峠前であつた。  
こゝから草津街まで沿つて二里、沓掛の破驛までは浅  
川の裾野四里の途分と原の東端を下つてゆくのである。

沓掛からは雪場の原の中を二里、軽井沢までとして今宵  
は軽井沢に泊るのである。かくすれば曾て追分と原の汽車  
の窓から眺めた浅の大雪はその輪廓の上に沿つて上下  
することになる。  
既に浅の大雪はその登攀を終へた。これからは再び  
その美しき裾野の道を出るのである。一畑の高原  
は盡く草花はつと落葉松の林疎らな彼方にはこの高  
原と烏川の畔の未だ流の平原とを分つ角落山の車脈  
が低く、うねり波を打つてその低く無れた碓氷嶺の彼方に  
は妙義山や上野西南部の山がその青い色を見せこゝる。  
晩秋の晴天やかに澄んだ空はその方へと無れてゐるやう  
に見えた。

茶屋の傍より深き浸蝕の名残の谷に注いで浮石の厚層  
を截つて路にした上を下つてゆく。見上げると浅沼山の  
頂上は藪状となして秋の空に浮んで、その頂からは絶え  
ぬ煙の風に流れて千切れ千切れに飛んでゆく。その片々の  
いづれも赤らみかけた午後夕の日に染まつて青く高く清む  
秋の空に雲と紡ぶ。

その頂から天と地の間に懸る裾野の一段の末を辿ると千  
曲の高原に登りゆく。八ヶ岳の連峰となる。  
げに八ヶ岳と浅沼とは千曲の高原に美しき千曲川の南と  
北に相對してこの大高原の所には自然に威風凛々つゝ小さく  
住んでゐる人類と嗤笑してゐる巨人であらう。恰かも  
エングラウリとフィステルパールホルンの同聲の如くに。

下から車が二台材木を積んで馬に曳かせてやってくる。沓  
掛の板挽場から来たものであらう。この三喜の荷車は自身  
等に遭つた及ばず暫しこの淋しい晩秋の高原をこの幸に  
中人の泣と共に進んでゆくのであらう。

自分等はそれに分れて沓掛へと同じやうに軽石のザリザリした  
淋しい道をゆくのである。

足元の谷の底にも細い道がついてゐる。曾て此所を通つた  
時にも見た。何處に行く道であらう。荒れた谷の底から落  
葉松の林の中へと分けたる細い道は。この高原の一隅に住  
んでゐるやうな細道ばかりあるであらうツルゲネーフの描い  
たやうな光景は、こちらも轉つてゐることであらう。

その底に白樺が見える。白く輝いてゐる幹は午後夕日に

一とまは輝いた。道の傍にもよりの稚いの三角形の果菜菜  
 が黄ぼんで草の枯れた間に生えてゐる。世毒のつるにはシラメイ  
 菊や野菊、龍膽、山菊、松蟲草など可憐な晩秋の  
 野花が所々に咲き残して美しい。黄色した小蝶のおはれに  
 弱し、のがよるに力なく身飛んでゐる。行午はややう  
 近したる離山かうよの麓の雲場、香檳、その彼方には  
 廣々とついた高原に接する。南甘栗の山が枯草の色  
 鮮やかに大空の下に這ひ妙義は依りとして碓氷嶺の山  
 所にもよりの警を擡げてゐる。  
 出村までの林、道の両側には落葉松の林や低くうねる  
 丘陵やその間の谷間に高木の澄んだ大気に塵を落と  
 して消え去る。



稚野の  
 山

吹きとせす木は時同の野命がけ  
 把持

尾花の枯れとやどる、浮石の相擦れ踏まる、なほと音さつる所を進  
んゆくと浅るは一歩あにゆしづ、遠かる、ゆしづ、遠かる  
毎に高きけ彌まに増しゆくのは裾野から仰ぐ山との眺めであ  
る。浅るものしづ、遠かる毎に大きなるは高くなるゆくと  
谷の岨の道をさうねりうねり下つてゆくと裾野はたんと人に  
人里世になつてゆく、浅るは此方の下るにつれて高くなる  
つ、もたんと人形をまいてゆく、東側の旧火岩壁の裾はたんの  
が、前輪としりかひの音が漸く迫つて無間谷の現れ御釜の  
火口丘が現れる。  
何處より見るも偉大なのは浅るの赤である。遠き武蔵  
野の片隅より望むも、上野の平原より仰ぐも奥上野の高原  
より望むも千曲の高原より見るも、くの裾に立つて眺むる

も何處より見るも皆偉大である。バイロンはその放浪の旅  
にアルプスを見て云つた。高山は吾に取つては絶たなる感情  
なりといふ。我が清くを望むたび、身の何處に立ちし時なりと  
もバイロンのアルプスに對しし時の感懐がぬことはない。  
見直り勝ちに浅間を眺め、行手には北依久の高原の晚  
秋を望み、夕ならんとするこの荒原を下つてゆく。  
野暮の枯れたる赤松のひよりりとまえた下、白樺の舞  
うが風に戦ふあたり。その下ると今この谷の岨を傳  
ふ道は荒れたるの真中に来る。枯草の間に浮石を  
押し流した小流の跡の味知手にうねつて落葉松の間を  
しるす日かげは早冷やかにたゞ。原の東の山々には冷日  
が赤く染まつてその隈には夕暮がはや来らんとして

その上かゝる秋の空は夕にならぬ愈々冷く澄んで遠く遠く  
果てつゞいてぬるやうに思はれて、心細さが襲つて来る。  
たゞたかこの高原の平の殊に荒れた原を獨りぽつくと  
歩むやうな心地になつて曾て此所を過ぎた時う淋しい雲  
の多い夕を想ふうちあつた。  
夕のれの色はやうやくにして浅むの山に湧きはじめた。  
浮石の流れた跡にすきのゆく、畔に立つてこの偉大な山の  
將に暮れかゝると思ふた。  
偉大な山は暮れゆく姿ほと人に逼るものはあるまい。  
小流の古城跡に立つて浅むを眺めるときも黄昏であつた。  
そのときめは日の色の山の岨より、煙より次第に褪せて  
やがて黒む夕であつた。その暮れとして感に暮れん

るまで暖めてゐるとなるとなく淋しい細い感が胸に湧いた。

今日は落す人としてまだ浅草の襦の上にはびしてその隈には冷い夕暮の潜んで頂の煙が高層の風に靡くを見ては一日の暮一感と直覚せしめ、やうな気がした。げに山の暮る姿は一程の悲哀と感せしむるものがある。この姿を眺めて此所に立つことせむ。やがて夕暮の冷さの身に沁みかゝる感、荒原の歩行をたげられた。原の上の日は漸やくと薄れゆく。山の日の色は血のやうに赤くたつてやがて消えてしまふ。

離山の頂の三角點は夕日にあかあかと照らされて、山の一角と立つ。この山を眺めて浅草を仰いと前

嶺山の尖鋭美にも小さく三角點の標木が見えた。

夕暮は愈々冷くなる。先は薄れゆく。浅草の傾斜した裾野の輪廓は寒さうな落葉松の林に畫されて小浅草も寒さうな陰に沈んだ。牙やその下の石尊山なども寒さうな寒さうな色に染みだした。大空も寒さうな。高原の隅は寒さうな。

低い色に染んだ丘の肢には落葉松が枯れてゐた。その下を細い道を傳へてゆくと板橋場の直表に出る。冷い山の水に水車を轉らして板を挽いてゐる音が淋しい。荒原の隅に冷たく傳はつた。

その側から枯れた稲田に沿って香林の細い道をゆくと、離山の一角に残つてゐた赤い日と消えて夕暮は既

に總ての物に充ち渡つて来た。  
落葉松の林の側を繞り雑木林の下をゆき、山間の小田  
に沿ふとゆくと沓楯の古驛の晩煙が深くよるゝが見える。  
多くの街道の助の驛には杉の木立がその中庭あたりに  
必ずあるものであるが、この寒い高原にあつては、  
杉の木はなく寒げな樅や落葉松が疎くその側に  
生つて寒い、古驛をなほ寒く淋しくしてゐる。  
草津道は丁度その中程の傾いた家の傍に出るのである。  
そこかしこ石高な中仙道の十石道に沿ふとゆくと旧街道  
によく見る御平陣とか、脇御平陣など、  
未達の看板や石を置いた板屋根の傾いた家や、道の  
側の小流やすべてこの寒い、古驛を知らぬものはない。

この宿の脇御平陣のます屋といふのは去年の旅に泊つた家  
である。この時は夏でこの宿は草津へゆく旅家など  
や、賑そつたけれど今は秋の木のそれもなく所はびつ  
そりと夕暮のさびしさが屋根の石にも軒の古板にも見  
られた。とある軒下で馬の蹄を打つて来た。これも淋しい  
音のあった。所をばづいて板橋を渡る前に田の畦に  
腰かけて休んだ。もう佐久の高原はとつぷりと暮れ  
た、ハハ森は退分た中の晝さるあたりにその連峯の長  
い頂を紫に染めて夕照の赤くたなびくあたりに借え  
てゐる。浅くはこれと對して濃い枯梗色に寒げな  
古驛の彼方に大きく借えこゝる。二つの大火山は  
佐久の高原を同じして相欽して眠らるる二巨人であつ



た。ツルゲネーフ<sup>ま</sup>かゝる境に立たせたならば必ず此所に於てもかのユングラウとフイニステルホルンの同答を描いたに相違ない。

暮小行と浅る山の色は如何にも寂しい色をしてゐた。暮るゝ色はかり日の沈んだ夜の薄明に冷たく照された時の色も今の如くに日かその陰に入つて山が紫色の大塊となつたときも淋しさは同じである。小渚に見た時はその淋しさは身に沁みだ。今は自分は淋しいけれど山は禪定する高僧の如くになんとかなくゆつたりとして人に懐しい感と興へる。この時、人の淋しさも山が慰めるやうに思はれる。

こがうは平な暖炉の道と軽井沢にと急ぐのこがある。

見たからには浅るの山は  
 だんごの山か  
 この山は同様にたけが

水樹、海子



山と水樹の風景

見直り勝ちなのは夜にしてや夕日の色の美し、為めであった。  
高原の夕照の美しは、せめても平原のみ穂む人の見る  
ことは出来まい。美しい糸雲が枯稜色に濃く、  
頂から空の赤く焼けた上にかつて、夕照は淡く野  
を照してゐた。

星も輝きはじめた。道は小園になった。 離山、雲場  
の二村を過ぎてからには、夕照は褪せ、浅くは近  
離山に蔽はれて見えなくなった。これからには、  
中仙道の古道を取って軽井沢へと進んでゆくのである。  
月は碓氷の故園の上あたりから上った。竈岩を三角形に  
照し出して、重埜原一帯の埜原の茅原、淡くその  
影を投げた。行手には軽井沢の燈が、明く山の黒い、

たにきらきらして新軽井沢は宿舎の下に汽車の煙を水  
と知れた、翻山は友になつた。火山灰を踏んで月かげに照ら  
れて夜の高原をひたすう急だ。その中に遠かつた軽  
井沢は近となつて赤く塗つた西洋人の別荘が樅の木か  
げに見えて仲仙道の道はその驛の中に入つた。  
山はついに近、鶴屋とふゆに泊る、窓をあけたとき、  
冷気と共に月光に照された浅るすが夕暮の時と同じ  
やうに煙を噴き出て黒くこぼつてゐるのが見えた。この澄ん  
た寒、月の光まかの頂で眺めたらば如何であらう。如何に  
澄むたらう、又いかに冷い光であらう。

初五日。

（十月九日 軽井沢つる屋泊）

### 六 碓氷越

朝の軽井沢高原は美しかった。  
窓の窓を閉くと細い枝の先に紅らんだ葉のかつた  
柿の木の向ふに白壁の別荘があつて樅の木立の向ふには愛  
宕山がその中腹の樅の木と共に目に入る。浅る山は鳥  
色の毛玉のうぬ天鳥絨で包んだやうなその山の色の浮  
いたやうに秋の空に立ち煙は昨日の濃いのにひきかへてゆるく  
淡くなびてゐる。今日は美しい日だ。それに今日はこの晝  
頃までに二里を歩めばよいのであるから、気ものびのびとして晴れ  
やかな空と共に楽しい。  
軽井沢の所は今はその季節節むなから閑静で秋の空を  
通つた光は樅の木立の向ふに、雑木の落ち葉を照してゐる。

旧軽井沢から新軽井沢はゆく街道から眺めると樫の木蔭の  
 赤い洋館に日が當つてゐる。  
 真直し道の両側にはまばうた屋並の向ふには茅の葎つた  
 雲場原が融山の下まわつて今日にはハケ萩は修い  
 丘陵の上に頭ををしても遠い青い色は澄みまわつてゐた。  
 ついては千曲の山脈その上には日本アルプスの連脈がその尖峰  
 の並列を見せてゐる。やがて碓氷の上立つてこの高原の最  
 後の眺望の皆見景となるであらう。  
 旧軽井沢から十所ばかりで新軽井沢の停車場の前になる。碓  
 氷峠の新道はここから峠の最低所を越えるものである。  
 外ヶ岳がアロスベクトポイントと呼ぶと云ふ龍岩の尖峰を右に  
 旧道の嶺の尾を左に真直し路をゆく。



落葉松の木々の點々として高原の上に散在して黄ばんだ  
緑の寒の色してゐるのに高原の最夜の眺望を果しみつ、  
時に顧ると信飛境よりアルプスかその雪に塗かれた尖峰  
に高原の地平線が突破してゐるのを見せこめる。標  
旗が常念旗であらう。

石油のタレクの傍から線路を踏み切つてオニク六の隧道の上  
にさしかる。アパート式のホームにはここからはじまるのである。

ここは枯草を布つてこの高原の最夜の眺望を縦手にした。  
目は何より先に地平線に遙かなる日平アルプスにまをる。雪を帯  
びて荒蕩たる寂寥の長壁をは越えことして天外に趨つてゐる。  
その壯觀に對しては誰か崇高なるものの外観に敬せらるるか  
而して信濃の大高原の西邊を獨り縦に走つてその辺に

に地平線と見ゆる所を見れば誰かその大観に感せられる者ぞ。  
ハハ然らば此所からは見えた。浅野の大森は悠然として一壺  
の美酒たる高原を領して眠らめて人界を眺めて静に観せる  
巨人の如くもある。

離山は尙く倦してその難い半面は赤く兀げこぬる。

碓氷の旧道、新旧程井沃すべし見える。

碓氷の眺望はけに廣く美しきものであった。浅野よの浅

野の森よ。碓氷川の平野より、又戸田の曠野より汝は姿

を高く仰ぎ遠く望むべしあらう。

かくてこの高原の眺望を及にして下り路にかうた。これからは

上野玉である。信濃に分れて上野に下ると總ては未だ秋

が浅い、糸も褪せない。

信濃は霜があつた。草は枯れてゐた。一壺を肴にして晝く黄  
ばんで酒と浴の境にあつた。峠一つ距つたこの未だ秋浅い山や  
谷を眺めると今まで観た高原の晩秋がすべてミレーが  
なにかと思ふ位だ。

もはや一歩一歩に低なるばかりだ。平原に近づけばかりだ。高原

の終点は一歩一歩に遠くたりやうなる。

これからの道は谷に沿つて下つてゆくのである。

ついでに見渡した碓氷山、碓氷がう妙義にうつり山々はその成

生が火山灰の集塊である為には水の浸蝕を受けていられる

骨立つた奇峯となつて狭い谷を夾んで立上つてゐる。

皆平原に近い山だ。山中の山ではな。

向ふに赤城山が見える。廣く裾野をめぐらしてその分岐した

峯との廣い地頂は晴れやかに動きました。この麓には利根の河原であらう白く光る。この今足の下にある谷の川は行手に用いてある谷となす利根に入る。その畔に流るやうじある。

谷の岨とゆく道の傍には龍膽、鳥かぶと、野菊などが咲いて雑木は紅葉しかけたものもある。

集塊岩の崖の所に飛石して又その間に噴出した山石の枚状節理をなして飛石してあるのや、この道を同遊したときの名残に、カインサイトが散らばった穴の痕や、そのやうなものも側をめぐりめぐらう、岨路をつたてゆく、かけすであらう。うけたまひ、聲して雑木の林へ入ってしまった。

山毛櫛、椽などの木かげの道を山栗の鉢まふみつけむか

ら山道を歩んでゆく。

熊の牙まの二里は殆ど同じやうな光景であつた。碓氷川の右を左に山の高、岸を右にその岨をゆく。鉄道と隧路と、待道とは交錯して至る所に現れた。紅葉も早きは美しく岨の中に燃えてゐる。

待道は山の尾がせしめてゐると必ずその岨をめぐる。鉄道は尾と尾の間がつかうすに隧路にたつて待道が尾を遡り終ると必ず向ふには沢に架けた赤煉瓦の橋が見えてその向には又次のトンネルがある。

峠の頂が二十六号で熊の平の上が十三号である。熊の平まで十号ある。その多くは前者のやうな具合にゆくのである。碓氷峠はこの新道をゆくよりは旧駐井沢から登る方が

趣致が深い。道は消えかうて草の間に僅に残る。山を攀  
の林や柿の並木や峠所の力餅や又二里もつゞく枚数節理  
の形出した屋や、それも廢物の古道に沿って排列されて  
淋しい旅才慰めた。

その趣致深い道に比すればこの新道はつまらぬ。世趣味  
だ。

振り返ると谷の奥にはかうプロミスポイントが見える。二里  
の道は屈曲してゐる為めに直徑にすれば何つぱしにもならぬ  
。い  
。峯の上の山を攀や柿の並木を望み谷の下のあけびを  
見つ、峠道をゆくもはや能の平は近い。棧を架け換へて  
わた工夫に尋ねたときにはおと二つ峯を廻るのだといった。

同じやうな峯の尾をめぐりぬく。道に最後の者をめぐり終  
ると丘の上にも目的地の停車場が見えるといふのであつたが  
最後のものは隧道を通りして直ちに能の平の停車場につい  
た。

停車場の前に茶店がある。ここを過ぎると、  
狭いかなど買つてスタンプを押して世間たりスゲツたりして  
ゐる中に汽車がくる。ここを汽車に乗る。丁度十二時五分で  
あつた。

軽井沢までたのは九時頃であつたらう。岩の下のプラットフォーム  
まで汽車が離れてしまふと間もなく又隧道がある。汽車は岩  
をたして進んでゆく中に街道は再び空の下に現れておかして  
新旧二つの街道が合して廣いものになる。先には夏の風景



に旧道を下つて此所から阪本、横川と下つて横川からは汽車で  
上野まで行つてその旅を終へたことがあつた。浅野に登り  
水戸縣に宿つたのはその旅であつた。

熊の平から十の隧道毎に下つて才一の隧道を出てしまふと  
もはやアプトではなくなつてしまふ。阪本の所の杉や五料村、  
妙義の支那など上毛の平原地は往々に悪用された。

おんおん下つて山に杉が多くなつて平原らしい田や村が窓の外に  
見えるやうになつた頃はもう坂本も過ぎて横川に着くので  
あつた。

七 碓氷川より神流川まで。

横川からは幾度かこの峠を過ぎた碓氷川の畔を汽車がゆく  
のである。碓氷線の崖々としてアプト式の歯車を軌つて来た

車は川の畔の美しい平地の道を進んでゆく。

横川を離れるとアプトもなく五料村の寒村の彼方には妙義の  
奇峯が紅葉した頂の紫に日を吸つて百合若射抜岩の  
少くも空を覗かされた。

金鷄、金洞、中の嶺、白雲山などの峯々あり、これも寒村に  
骨瘦せて秋の實りの野の彼方に秋の空に高い。

碓氷川は清く澄んで瘦せた流が中仙道の杉並木の見える  
丘の下に流れてのたが今は又轉じて空の右となつて妙義の  
方から来た低い丘の下に白い泡を立て、流れてゆく。

たには中仙道の杉並木やそれに沿つた淋しい村や碓氷つ  
つきの低い丘陵を望み、行く中に松井田の驛にくる。  
妙義は轉じて射抜の穴はぐれ、金洞山はその中央に顔

として動ぬ坐禪の僧のやうに見える。

こかうは再び碓氷川を左にたんとんに廣くなる谷の中を  
ゆく。丘のふちから時々妙義を見つ、行くと中仙道は常  
に河の彼方の丘にその杉並木と寒げな家の並にそれと  
知られる。

この辺は曾て夕暮の淋しい時に過ぎたこともある。干の強  
光を浴びてぬるまを見たこともある。いづれも夏であった。

今秋の澄んだ光がこの野に満ちあふるのを見るときも美しく  
実った田の面や萩草色の見える丘、淋しい古道、そのや  
うなものに満ち溢った秋の光を見るとこの窓かゝる眺は  
忘れぬものとなる。

磯部、安中とすると平な田の畔の丘は愈々低くなって

向ふの丘の上には安中町の長くついた驛の屋根やその板  
の杉の森や後閑あたりの丘が見えて、榛名も見えはじめた。  
浅くはどの煙たつ頂を半天に掛けて、碓氷から角落につく  
山々をふんまて當面にこぼれ仰がれた。昨日はあの頂に立って  
この谷を眺めたのである。

碓氷の山々もここから見れば高  
くこの谷の奥を深くとつてゆくけれど、この頂からは一望平らかな  
高原が浅くは裾にわたつて美しく擴がらぬものがあると思  
ふと今眼界にある平原を眺めて今朝の最後の眺望  
を催した。向原を想はすにおろふなかつた。

碓氷峠は峠といふよりも古名の碓氷坂といふのが當つておやう。  
安中の町にも安中氏の歴史の跡がある。昨日とこの前の  
日にかけて過ぎた千曲の畔にも歴史の跡は多きが碓氷峠には

昔は日本武尊の故事や下つて新田義宗と足利との戦  
更下つて武田氏と上杉氏の戦、力らの幾多の歴史は  
この峠に残つてゐる。

峠を下つては坂本、松井田は豊臣氏の一軍として前田利家  
上杉景勝が北條を攻めんとして先づこゝに大導寺氏を破  
つた古戦場である。かくこの一軍は碓氷川つたいに奥  
東の平原に出て諸城を抜いてまゝ小田原を攻め八王子を  
抜いたのである。

今もこの径を汽車でゆく、  
安中の驛を出ると及田の山がこつ出て来た及田川が碓氷川  
に合するあたりから、鷹ノ巣山の断面が水の畔に屹として  
ゐる。

板鼻の宿の所で鉄橋があつて川は又空の右となる。

浅うは及に依然として高、碓氷の山が遠くなる。此は  
棒名山や、それと對して赤城、その下に子持山などが平原  
の彼方に古く火山によく見る廣い裾野を帯びてその上に  
屹立した群峰を載せて秋の空に聳えてゐる。

棒名は掃部菰が尖つてゐる。棒名の西には角落山の尖  
峰が獨り連山の上に抽つてゐた。

木の少ない、棒名や角落山の山々は、つれも枯草色になつて  
山々の間の近く思はれぬ山々の空気が澄んでゐたから  
あらう。赤城は、黒棒はかくれて鋸割山が高く見えてゐた。  
鈴ヶ森もよく見えた。白川の谷は、その山側に深く刻まれて  
袋の肩から引下した裾野の一流の棒名の裾に垂てる上

上には利根郡の諸山の美しい姿が見えた。

もうすつかり汽車の通る所は平原の眺になつてゐる。向ふの秋の空に立つ山を望むとこの平原の秋が美しく眺に  
入る。鳥川を渡つて飯塚に入るともう高崎の所はつれに  
入る。高崎の所へ入ると、これも眺にのほは流川行の鉄道  
馬車もある。赤城、榛名の二山の方を利根に添ふてゆく  
この馬車の行きを必ず望む。そして或る作家のよき描く利  
根郡あたりの景色を憶ふ。

高崎を出てから倉賀野まひの間に赤城の方を望む  
と前橋市から小暮所につく高原まで望むことが出来る。  
この上には赤城の廣、裾が八字にゆたり引かれて、から  
は鉛刺から地蔵につく駈駈の滑りやうな隆起が目に入る。

倉賀野あたりには赤松の林が所々に赤い美しい幹を  
に照して散在してゐる。驛のはつれには鍋川がある。砂のあか  
あかと照された積には青く澄んだ水が細く流れて草が枯れた  
この上には今通る汽車の影が紫に落ちた。

川を渡り終るとまた平原になる。赤松の林のうす過ぎて  
平原の汽車の飛びやうに早く進むと新所に入る。この四か  
らは秩父が近くなつて神流川を渡るとそこには川上の山々は  
美しい色をしてゐた。

もはやここからは武蔵の山だ。

### ハ武蔵野

武蔵野には山はない。けれど山を見るのにはかほとによい  
平原はあまりあるまい。秩父や妙義や赤城や榛名や

日光や、那須、塩原、遠く、孤波や、溝、また轉じては不二、  
雨降、丹波山、この北武蔵の曠原を汽車で通りつゝ、窓外の  
地平線に眼を放つと、その諸山はさまざまの色して眼に入るの  
である。樺尾や赤城は遠くれば遠くほど形は優美と  
なる。赤城の裏から尾尾につく諸山の上には日光の驛山  
かゝるの頂を見せぬ。不二形した男体、その西には太郎とあ  
るには女顔、少し離れて雪を被つた頂は白根の奥の奥、白  
根であらう。尾尾の庚申山は黒い色して低く見える。  
左から深谷あたりの曠原、その上から見渡した国を平  
野の北部の山はえんじ色であった。林中農家の點在する  
地平線には孤波が双尖を擡げた。  
窓の外には常にその虚空に書きなした波を打つ鉄又の

山々が遠く、近く、や、身なり合つて、腰の先にかゝるばかり、秋の光  
を吸つて、たんたん、眼から流れてくる、又急に眼に近づくと、  
たかも虚空に眼を擡げて、やうである。  
この一帯の北部の武蔵野平原は松林と行った空漠の原野  
や畑や田や桑畑と行つて、窓の外に汽車の窓から南につく  
申仙道の道に流るは、製紙場らしい、白壁もある。  
熊谷にまると、桜の葉を、色づいた熊谷堤が現れる。  
鉄又の山は、その上に、頭をたして、桜の木の下に、その峰々が見  
える。  
汽車の進む中にも日は漸く赤くなりまざる。秋の夕の美  
して、日に母に異つた境を見る。先日は佐久の高原に、昨  
日は浅沼の麓の薄紅る、野に、今日は武蔵野の二隅に。

全くこの赤い日かげに照らされては冷る物が秋の殊に深く  
なる。その美しき花やかた色の何處かに冷い光が淋しみと共  
に満ち溢る。そしてその赤みがやうやうに薄れて行く。と  
遠く夕暮の寒い気が身に沁む。まださほどに暮れはしなかつ  
た。秋夕はやくやく自りけはめた。吹上、鴻の巣、稱川、と  
武蔵野はもう一驛毎に村が多くなつて松原ちとが少くなつ  
て平野の傍が何處となし見えて来て平野平野らしいと云ふやう  
な具合になつてくる。

上尾大宮と本庄頃はたゞ日が赤らつてゐた。大宮原をた  
に進むうちに中仙道は空のたに後つた。その踏切は随分  
前かつ自分の記憶に上まつてゐる。たしか自分の十一の  
時だ。獨り中仙道を大宮まで歩いたことがある。秋のあ

つた。浦和の所の元標かう。に本庄とときには日が赤らみかけ  
てゐた。そして淋しい思ひに打たれてた。このあたりに空たつてゐ  
たところ。いつも汽車で通つてこの踏切を見る。及、そのとき  
の淋しい本想ひをさぬことはない。(車に上るとその時大宮か  
ら乗った汽車が今と同じ時刻のものかも知れぬ。)

浦和、蕨、とくるともはや自分の常に道逢する河畔かう  
赤羽の曠原が遠くなつた。と薄れた秩父を望みつ、この  
野をゆくうちに川原の所や堤防や赤羽の丘などが目に入る。  
かくて戸田の鉦橋に本庄頃は日は消えて秩父の方に沈ま  
んとしてゐた。

もうさ、からは常に道逢して知って知りぬいてゐる境だ。  
そのとちを旅の帰りに外に見つ、汽車が通つたのも一種謂

はねぬのすまもた。全作この旅は追想を念に旅だ。  
旅の最初も西部の武藏野を過ぎた。こゝも追想した  
ことの多、野であった。

すつと旅が進んで更科の里あたりからは千曲の高原、浅草、  
皆吉、もあれば新しいものもある。追憶の糸を辿るものであつ  
た。浅草の東麓、ゆるゆるの古驛、ゆるゆるときを想ひ出し  
こゝの追想の樂しさを味つた。またそのときの淋しさを想  
ひ出した。碓氷峠から此方の碓氷川の谷や北武藏の曠原、  
戸田河原の野、この旅の半ばは追憶で満たされておた。  
けれどもその追憶も樂しいものであつた。やがてこの旅も追憶  
の煙と打つるものあらう。ゆるゆるときを樂しからうか、悲しから  
うか。いづれであらう。

赤羽、王子、田端、日暮里と過ぎて夕暮の影は深く下  
つて空は星の輝く天上野に著いた。不忍の池の畔から  
夜の路王家に帰つたのは六時半位であつた。  
かくして秋の旅は終つた。

(十月十日)

妙美山

立去る事上規

眉毛に於る峯

まむし







